みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Historical and Cultural Representation of Nanai-Heje Ethnicity : A Case Study on the people of Geiker hala in Aoqi Village

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-02-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐々木, 史郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003806

国立民族学博物館研究報告39(3): 321-373 (2015)

北東アジア先住民族の歴史･文化表象[1)]
──中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から──

佐々木　史　郎*

Historical and Cultural Representation of Nanai-Heje Ethnicity: A Case Study on the people of Geiker hala in Aoqi Village

Shiro Sasaki

本稿は中国黒竜江省の松花江（スンガリー川）沿岸にある敖其（アオチ）と呼ばれる赫哲族の村に最近新設された博物館での展示を一つの材料として，赫哲族あるいはナーナイと呼ばれるアムール川流域（主に松花江下流域，ウスリー川流域とウスリー川河口より下流のアムール川流域）に広く居住する人々についての文化表象と歴史表象の統合を図り，さらに文化人類学（以下「人類学」と略称する），民族学による歴史研究の方法と民族誌の内容の通時的相対化という問題を検討することを目的としている。従来多くの民族誌で「未開の漁撈狩猟民族」あるいは「自然と共生する文化を持つ民族」という扱いを受けてきた彼らは，実際には中国，日本，韓国・朝鮮を含む東アジア，北東アジアの歴史の中で重要な役割を果たしたキープレイヤーだった。しかし，近代国家の統治の下で，「未開民族」，「異教徒」などのレッテルと共に最低の社会階層に位置づけられ，彼らが優先的権利を有していた資源からも疎外され，貧困状態に陥り，一見「未開」な状態に見える生活を強いられた。そこを人類学者や民族学者に調査され，それを普遍的な状態として民族誌の中で喧伝されてきた。本稿では，歴史史料に登場する 17 世紀以来の彼らの祖先たち，特にゲイケル・ハラと呼ばれる赫哲族＝ナーナイの一つの有力な氏族集団の祖先たちの活動を分析することで，民族誌に書かれている内容を無条件で受容してはならないことを指摘すると共に，民族文化の紹介の場として最も普及している博物館施設において，歴史を加味した新しい文化像をいかに展示すればよいかを検討する。

*国立民族学博物館先端人類学研究部

Key Words：Heje, Nanai, museum, cultural representation, historical representation
キーワード：赫哲族，ナーナイ，博物館，文化表象，歴史表象

1　序論
2　赫哲族とナーナイ
3　ゲイケル・ハラの軌跡――中国側の記録より
4　もう一つのゲイケル・ハラ――ロシア側の記録と記憶より
5　敖其村の博物館――ロシアの先住民族村落の博物館との比較の視点から
6　少数民族の文化表象と歴史表象の諸問題
6.1　中国とロシアの民族文化に関する博物館展示の比較
6.2　歴史と文化のつながり
6.3　民族誌と民族文化表象の相対化
6.4　言語，国境を越える研究協力
6.5　敖其村の博物館の評価
7　結論

In this paper I will discuss the integration of the cultural and historical representations of the hunter-gather societies of Northeast Asia. More concretely, I will analyze the ethnography, a museum exhibition, and historical documents concerning the Nanai-Heje people of the Khabarovsk region of Russia and Heilongjiang Province of China, to correlate the contents of the ethnography written by anthropologists and ethnologists with regional history and to establish a new historical-cultural representation of this people.

In many kinds of ethnography, the Nanai-Heje people have been described as poor and uncivilized hunter-gatherers in the North, as if they had maintained a subsistence system, material culture, life style, social organization, and belief system unchanged since the Stone Age or Bronze Age. However, historical documents of the seventeenth, eighteenth, and nineteenth centuries tell us that their genealogical and cultural ancestors played a decisive role in the establishment of the control of the Qing dynasty (the last Chinese dynasty established by the Manchurian people) over Northeast Asia and that some of them were appointed chiefs, officers, and even generals of the Manchurian army, and administrative officials of the dynasty. These facts mean that they were civilized people and key players in history, and that they often experienced drastic culture change in accordance with changes in political and economic conditions.

Analysis of the historical documents also reveals that their poverty and social status as seen at the end of the nineteenth and beginning of the twentieth century were results of the policies of modernized countries, which deprived them of their rights to natural resources and commercial activities, in order to monopolize these for the enrichment of the countries and their governing classes. Anthropologists and ethnologists observed and described them

only in this situation. One should not simply believe their ethnography as a general representation of their culture without any suspicions.

In this paper I will analyze historical documents on the Geiker hala, one of the clans of the Nanai-Heje people, and an exhibition at a museum in a Heje village named Aoqi, located on the right bank of the Sungari River near Jiamusu. This museum exhibits the history and culture of this clan, because its members founded the village. Based on this analysis, I will discuss how to integrate the cultural and historical representations of the hunter-gathers of Northeast Asia, and how to establish a more appropriate exhibition of their culture in ethnological and regional museums.

1　序論

本稿は中国黒竜江省の松花江（スンガリー川）沿岸の佳木斯（ジャムス）市の市域の中にある敖其（アオチ）と呼ばれる赫哲族の村に最近新設された博物館での展示を一つの契機として，北東アジアの先住民族とされる赫哲族あるいはナーナイ[2)]と呼ばれるアムール川流域（主に松花江下流域，ウスリー川流域とウスリー川河口より下流のアムール川流域，図 1 参照）に広く居住する人々についての民族誌と博物館展示における文化表象と歴史表象に関する考察を行うことを目的としている。より具体的には，人類学的，民族学的研究が構築してきた文化表象と歴史学的研究が構築してきた歴史表象の統合を図り，さらに人類学や民族学による歴史研究の方法論の探求と民族誌の内容の通時的相対化という問題までを検討する。

赫哲族やナーナイを含むアムール川流域の先住民族は，現在中国では「少数民族」（少数民族 shaoshuminzu），ロシアでは「北方先住少数民族」（коренные малочисленные народы Севера）と定義されている。彼らは人類学者，民族学者，あるいは歴史学者などから長らく「狩猟採集民」あるいは「狩猟採集民族」であると考えられてきた。後述のように，実際にかつては狩猟，漁撈（漁業），採集活動が生業に占める割合が高く，農業も行うが，その生業に占める比率は低かった（現在は食料基盤の大きな部分を自宅での菜園農業が支える）。また，社会的，精神的に狩猟，漁撈活動は現在でも重要な位置を占めている。したがって，本稿ではその「狩猟採集民」の文化に対する解釈，すなわち民族誌に描かれてきた文化表象を歴史の文脈の中で相対化して，再解釈することになる。

また，彼らは今の居住地に住み始めた当初から「少数民族」や「先住少数民族」だったわけではない。そのように定義したのは彼らの居住地をかつて支配した，ある

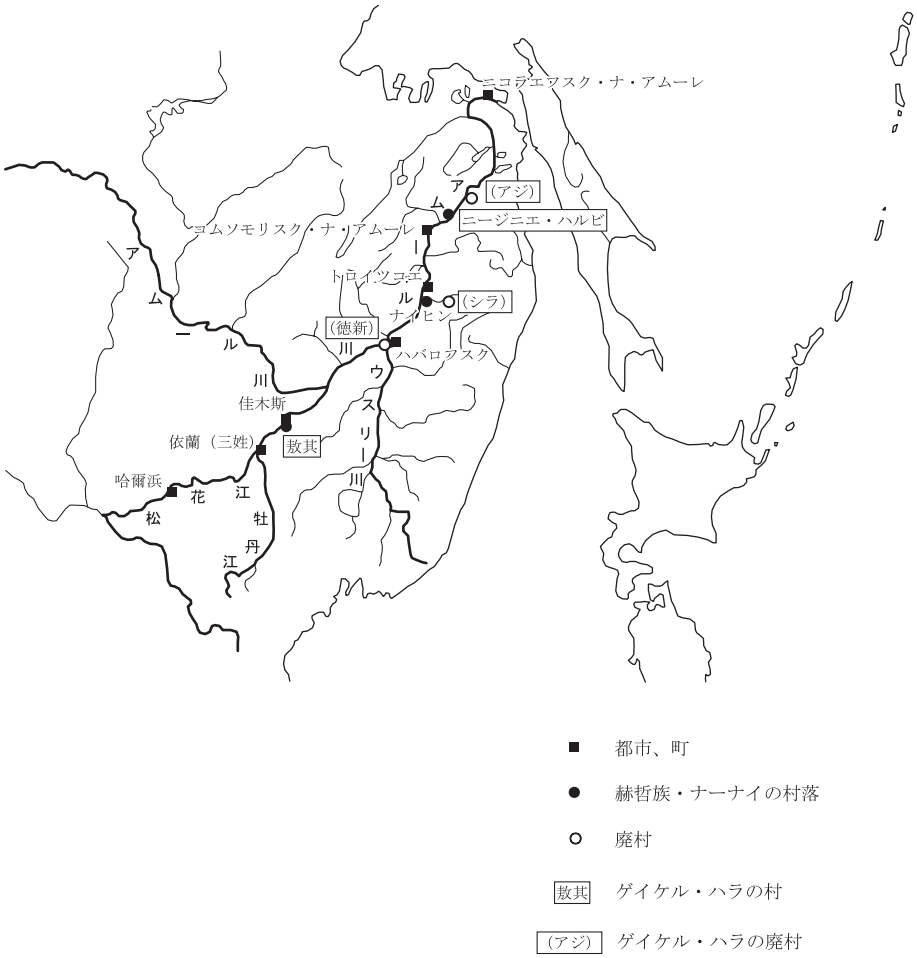

図 1　北東アジアと敖其村の位置

いは現在支配する国家の都合であり，そして現在のそのような定義にも人類学者，民族学者，あるいは歴史学者の研究が大きく関わっている。つまり，彼らの現在の社会的地位や経済状態は，近代国家が研究者の成果を利用しつつ意図的に作り上げたものであり，それも歴史的な文脈の中で相対化し，再解釈する必要がある。

国の少数者（minority）あるいは先住民（indigenous people）とされる狩猟採集民たちの社会と文化の解釈と彼らの歴史をめぐる諸問題は，有名な「カラハリ論争」（アフリカ南部のカラハリ砂漠を中心に暮らすサンのような狩猟採集社会の解釈をめぐる論争）に代表されるように，アフリカや北アメリカなど欧米の研究者が得意とする地域を中心に展開されてきた。しかし，実は彼らが最も不得意とする北東アジア（中国

東北地方，極東ロシア南部，日本列島北部を含む）でこそ，そのような議論はふさわしいと筆者は考えている。なぜならば，北東アジアには世界でも恵まれた狩猟漁撈採集資源があり（豊かな森林とそこを流れる大河，湖沼等に生息する野生動物，魚類，そして有用植物），そこには多様な文化を持つ狩猟採集社会が多数存在する上に，近くには中国，日本，朝鮮，満洲，モンゴル，ロシアという文字記録を残した国家が控え，古い時代から彼らに関する豊富な歴史文献が残されてきたからである。しかも，その記録は 13 世紀から飛躍的に増大し，17 世紀以降には個人の活動すら追跡できるほどの精度を持っている。その歴史的な情報の質と量と多様性は，欧米の人類学者が議論してきたアフリカの熱帯雨林や乾燥地帯あるいは北アメリカの森林地域やツンドラ地帯などの狩猟採集社会に関する記録とは比較にならない。すなわち北東アジアは，人類学者や民族学者が描いた狩猟採集社会に関する民族誌を時間軸に沿って相対化し，そこから得られるモデルを通時的な視点を持って比較，普遍化するための大きな可能性を秘めている。

しかし，北東アジアの狩猟採集社会を最も得意なフィールドとしてきたロシア，旧ソ連の人類学者，民族学者には残念ながらそのような視点はなかった。また，西欧からこの分野を輸入した日本，そして日本と西欧から輸入した中国の人類学者，民族学者たちもそのような視点を長らく持つことができなかった[3)]。本稿で扱おうとしている赫哲族，ナーナイの社会と文化は，歴史的な視野をもって研究すべき対象の典型であるにもかかわらず，誰もそのような視点で民族誌を描こうとしてこなかった。

赫哲族，ナーナイは従来の多くの民族誌で，漁撈と狩猟，採集を主な生業とした自然に依存する生活を送り，シャマニズムや精霊信仰を持ち，氏族制度を柱として階級や階層の分化が未発達な社会に生きる人々として描かれてきた。ことに進化主義の影響が強い民族誌では明確に「未開民族」,「原始民族」という規定がなされ，固有言語を表記するための書記体系（文字）を持たず，歴史もない，石器時代からせいぜい金属器が登場したぐらいの先史時代の社会や文化を現代に残すような人々とされてきた。例えば，ナーナイの最も基本的で包括的な民族誌である『アムール川，ウスリー川，スンガリー川のゴリド』（1922 年，ウラジオストーク）の著者である I. A. ロパーチン（И. А. Лопатинъ）は，その冒頭で，「1912 年に大学を卒業したときに，私は自分の力をフィールドにおける民族学的な調査で試してみたくなった。そして，自分の希望として，最も研究がなされていない原始民族，ゴリドを調査対象として選ぶことを，アムール地方研究協会に伝えた。」（Лопатинъ 1922: I）と記している。ロパーチンにとってゴリド（Гольды，ナーナイの旧称）は「原始民族」（первобытный народъ）

の代表的な存在だったのである。

その後，ロシアでは 1930 年代以後，中国では 1950 年代以降になると，そのような「原始」,「未開」の状態にいた人々が，ロシア側ならばソ連の社会主義的発展プログラムによって，中国ならば人民共和国以後のやはり社会主義的発展政策によって，社会主義段階にまで飛躍し，現代的な生活を謳歌するようになったというシナリオが付けられた[4)]。

近年の民族誌やモノグラフではさすがに「原始」,「未開」という形容詞を冠することは少なくなった。しかしそれでも，人類学者や民族学者の研究では彼らの「歴史」に対する認識は深いとはいえない。2000 年代以後もロシア，中国でナーナイあるいは赫哲族の文化に関するモノグラフや一般読者を対象とする概説書がしばしば刊行されている（注 3 に示した文献を参照）。しかし，その歴史的な記述はいずれも，民族誌的現在の背景とするためか（Березницкий и др. 2003），批判対象として現在と対比されるためにあるのであって（《赫哲族简史》编写组 1984; 黑龙江省编辑组他編 2009），過去の事実から現存の民族誌を批判的に見直すためではない。

上述のように，本稿で取り上げる赫哲族，ナーナイと系譜的，文化的な繋がりを実証することができる彼らの祖先たちは，13 世紀以来中国の文献にたびたび登場し，ことに 17 世紀以後になると，氏族名や個人名までが史料に現れるようになり，彼らの具体的な動きが個人レベルでわかるようになる。そして，そこに描かれている祖先たちの活動は，明らかに清という巨大王朝の成立と発展に大きく寄与しており，その中から地方の駐留軍の将校クラスに上るものも少なくなく，ごく僅かではあるが宮廷の高官に登るものすらいた。そのような人々を輩出した集団の文化や社会が，生産力が低く，社会の複雑化，階層化が見られない「原始」,「未開」の状態にあったといえるのだろうか。歴史記録から得られる彼らの社会，文化についてのイメージと民族誌から得られるイメージとの間には大きなギャップが見られる。

長らく旧西側諸国の人類学者に門戸を閉ざしていたシベリアとロシア極東地域は，ソ連崩壊直前の 1990 年から開放されはじめ，先住民族の村で調査ができるようになった。筆者はその当初から調査を始めたが，その中で彼らの家や博物館に残されている民具や生活用具，儀礼用具，家宝などを実見する機会に恵まれ，さらに古い時代を記憶する老人たちとのインタビューを通じて祖先たちの事績を，断片的ながら知ることができた。そのようにして得られた資料と知見を，漢文や満洲文で書かれた史料の記述と照合すると，いくつかが見事に合致し，史料に書かれたことが実物や記憶として残されているのを確認できた。例えば，中国由来の龍の刺繍が入った絹の上衣や

北京の宮廷から下賜されたクジャクの羽の帽子飾りなどがアムール川流域のナーナイやウリチの村の家々に残されていたり，満洲旗人の娘が嫁いできたという伝承を残す村があったりした。また，それと同時に，史料に書かれなかったこともあることを知ることになった。しかしいずれにせよ，先住民族の人々自身が持つ歴史に対する意識や認識が，人類学者や民族学者による 19 世紀末以来の民族誌よりも，史料から得られるイメージに近かった。

そのような作業はさまざまな名目でアムール川流域に調査に行くたびに少しずつ続けたが[5]，中国側にいる赫哲族についてはなかなかその機会に恵まれなかった。しかし，2012 年に中国黒竜江省の松花江流域とウスリー川流域の赫哲族を調査することができ，中国側の赫哲族の現状について多くの知見を得るとともに，長らく注目してきたゲイケル・ハラ（Geiker hala / Гэйкер хала，中国では葛依克勒姓あるいは葛姓という）というロシアと中国に跨がって居住する一つの社会集団（ハラ *hala* とはナーナイ語，満洲語で氏族のような組織を意味する）についての新しい情報を得ることができた。このハラは，歴史記録にしばしば登場して，複数の主要人物の活動を知ることができるために，赫哲族＝ナーナイの祖先の動向と現代の人々の動向をつなぐのに最適な集団だった。筆者はかつてこの集団を中心にナーナイのエスニシティに関する論考を書いたことがある（佐々木 1991a; 1994）。本稿は中国側の現状を加味したそれらの続編であるともいえる。

この中国側のゲイケル・ハラの拠点集落である黒竜江省佳木斯市敖其村には近年博物館が新設された。その展示は筆者の論考を補足する情報を提供してくれるとともに，彼らを含む赫哲族全体の文化に対する考え方を見直す契機にもなった。そして，この調査で得られた知見と情報をこれまでのロシア側の調査で得られたものと比較することで，筆者が抱いてきたナーナイ，さらには北東アジアの先住民族の文化のイメージが基本的に実態に即していること，そして欧米や日本，中国の人類学者が民族誌の中で築き上げてきたイメージの方は，彼らの文化のほんの一部に光を当てることで得られたものに過ぎなかったことがわかってきた。本稿では，赫哲族＝ナーナイをはじめとする北東アジアの先住民族の文化のより包括的な像を得るために，敖其村で得られたゲイケル・ハラに関する知見と情報を，歴史文献と民族誌で確認した上で，それをロシア側での知見と併せて分析して，民族誌や博物館における先住民族あるいは少数民族の文化表象のあり方，さらには人類学と民族学による歴史研究のあり方について考えたところを述べていきたい。

筆者はこれまで，歴史文献に記されている民族に類する集団（例えば清代の赫哲，

費雅喀，庫頁，鄂倫春など）の属性として記されている文化特性を現代の諸民族と比較し，さらに，清代から明確に記されるようになるハラ（中国語では姓）と呼ばれる父系集団（氏族に相当）を時代ごとに追跡することによって，現代の民族の枠組みとエスニシティの形成過程を追ってきた（佐々木 1990a; 1990b; 2001; 2011）。また，歴史記録からアムール川流域とサハリンの先住民族の祖先たちの交易活動を復元し，彼らの社会と文化の中で近現代の民族誌では描いてこなかった側面に光を当てることもした（佐々木 1996; 1998; 2010）。それに対して，本稿では，そこから一歩踏み出し，ゲイケル・ハラというナーナイ，赫哲族の中の下位集団を主要な研究対象として，歴史史料に表れているその祖先たちに関する記述と，博物館に見られる彼らの文化に関する展示とを比較しつつ，民族誌あるいは文化展示における歴史表象と文化表象の統合のあり方について論じたい。

本稿では以下のような構成で論を進める。まず，赫哲族あるいはナーナイと呼ばれる民族の概略とそのような民族分類，枠組みの成立過程，そしてそこに潜む問題点を指摘する。続いて，敖其村の基礎を築いたゲイケル・ハラと呼ばれる人々の来歴を中国側，ロシア側両方の史料から分析して，歴史研究によってこの人々をどのように捉え，描くことができるのかを考察する。続いて，最新の調査対象である敖其村の博物館の展示を紹介するとともに，従来のロシア側の調査で実見した地方博物館（特にハバロフスクとウラジオストークの郷土博物館，そしてゲイケル・ハラの人々のロシア側の拠点集落の一つであるニージニエ・ハルビ村の資料館）の先住民族展示と比較し，そこから歴史展示と文化展示のあり方，歴史認識と文化表象の関係性の問題へと進む。そして，最後に民族誌の記述内容の通時的相対化の問題へと掘り下げていく。それによって，人類学と民族学の時間軸に沿った通時的研究から得られる成果とその意義を明らかにしていきたい。

なお，人名，地名，集団名，事項名の表記は基本的に日本語の漢字と仮名を用い，必要に応じてローマ字，ロシア文字，発音記号による表記を併用した。それに対して引用に際しての表記は，できる限り原典の表記をそのまま引き写すようにした。したがって，現代中国語からの引用では簡体字を用い，漢文からの引用では繁体字あるいは正字と呼ばれる書体を用いて，その日本語訳を付した。ロシア語もロシア革命以前の文章からの引用の場合には古い綴りを使用した。ただし，満洲語についてはメルレンドルフ方式に則ってローマ字化して示した。

2　赫哲族とナーナイ

中国の少数民族の一つに数えられている赫哲族は，ロシア側にいる北方先住民族の一つであるナーナイと同じ「民族」であるといわれてきた[6)]。確かに赫哲（拼音表記では hezhe）と同じ言葉が同じ意味を持ってナーナイ語にもある。発音表記では hədʒə，キリル文字表記では хэдие（Оненко 1980: 486，以下ナーナイ語のキリル文字表記は Оненко 1980 に準拠する）と記すことができ，「川の下流」を意味する[7)]。彼らの生産形態，物質文化，社会構造，精神文化にも共通性があり[8)]，何よりも文書で確認できる限りにおいて 17 世紀初頭以来同じ歴史的経験を共有している。

20 世紀後半以来「民族」という概念に関して，それに所属する人々の帰属意識，アイデンティティを重視するような定義が主流となり，言語や文化の同一性があまり重視されなくなりつつある。それを念頭においてか，1991 年にソ連が崩壊してロシアが以前よりも開放された国家となって以来，赫哲族とナーナイの交流も行われるようになった。1 つの民族としての意識を確認し，高めようという意図もそこに見られるようである。

現在の中ロ国境の原型は 1858 年のアイグン条約と 60 年の北京条約で形成された。そのとき，松花江（スンガリー川）流域とウスリー川（烏蘇里江）流域からアムール川（黒竜江）流域に連続的に分布していた人々が国境によって 2 つの国家に分断された。この松花江からウスリー川，アムール川といった流域に連続的に村落を並べて住み着いた人々すべてに，同じ民族であるという意識が共有されていたかどうかは定かではない。松花江のインダモ Индамо（現在の佳木斯市近くに流れ込む松花江の支流に音達木 Yindamu という川があり，その河口付近にあったと考えられる）という集落とウスリー川流域の興凱湖（ハンカ湖）周辺から，アムール川下流のケウルミ Кэурми，チウチャ Чіуча という集落までの間に暮らす人々を「ゴリド」（ドイツ語では Golden，ロシア語では Гольды）と呼んでひとつの民族とすることを提唱したのは，19 世紀のロシアの民族学者レオポルド・フォン・シュレンク L. von Schrenck / Л. И. Шренкъ である。彼はこの広大な地域に暮らす人々の間には多くの方言があり，文化的な差異が見られることを認めつつも，彼らを一民族と認定した（Шренкъ 1883: 28–30, 151–152）。それが現在まで研究者，行政，そして当の住民の間で受け継がれ，定着してきた。ナーナイ（発音記号では nɑ:nai，キリル文字表記では нанай。なおこの名称は「地」を意味する nɑ: あるいは на と，「～人」を意味する nai あるいは най と

に分解できる）というのは「その土地の人」を意味するナーナイ語の名称だが，それは 1930 年代にソ連政府が民族名に自称を優先して使用するという政策を採用した結果，「ゴリド」に代わって普及した名称である（ロシアの正式名称では「ナナイツィ」нанайцы）。そのためにこの名称が指し示す人々の範囲，言語，文化はゴリドと全く同じである（図 2）。

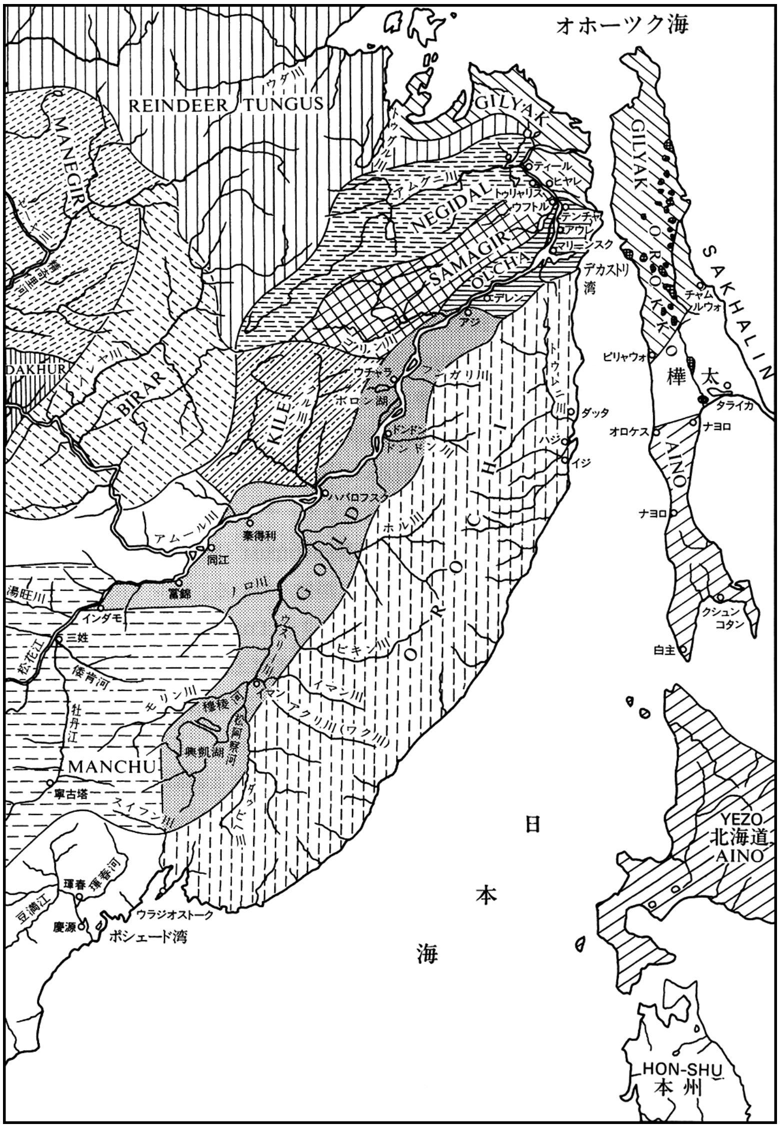

図 2　シュレンクによる 1850 年代の民族分布図（和田（1942: 折り込み地図）を改変）

それに対して，中国側の「赫哲族」というのは，中華人民共和国政府が 1950 年代にソ連の政策に倣って行った「民族識別工作」の一環で定められた民族と名称である。しかし，中国ではそれ以前から，同じ地域の住民をいくつかに区分していて，その中に「赫哲族」という名称と分類も見られた。例えば，1930 年代にはすでに松花江下流域の現在の「赫哲族」の人々は同じ名称で呼ばれていて，凌純聲や赤松智城，泉靖一がこの名称を使った民族誌を残している（凌 1934; 赤松・泉 1938）。さらに，この名称と分類のもとはそれ以前の清代にさかのぼることができる。1751 年（乾隆 16 年）に編纂が始まり 61 年（乾隆 26 年）には完成したと考えられている『職貢圖』（刊本は『皇清職貢圖』）という清に朝貢ないし交易をする国内外の異文化集団の文化特性を簡便にまとめた図解史料にも，巻三に東北地方の集団の 1 つとして「赫哲」（これは漢文表記で，満洲語表記では heje となる）が登場する（皇清職貢圖 1761（1991）: 254–256）。赫哲という名称と分類は 17 世紀半ばまでさかのぼることができる。赫哲には「黒金」，「黒津」などの漢字が当てられることもあった[9]。ただし，1650 年代から史料に登場するこの名称が示す人々の範囲は現在の赫哲族と一致するわけではない。この言葉の意味内容と指し示す人々の範囲も現在までの 350 年の間さまざまに変化した。当時の分類はある程度言語や文化の相違を念頭におきつつも，近現代の「民族」という枠組みとは異なっていた。それについてはすでにいくつか論考を書いたが（佐々木 1994; 2001; 2011），簡単にまとめれば，清代の「赫哲」とは清朝に比較的忠実な毛皮貢納民（「東北辺民」）で，満洲八旗には編入されていないが，その予備軍的な性格を持つ人々を包含していた。事実「赫哲」と呼ばれてきた人々から幾度か満洲八旗の編成が行われた[10]。同じ毛皮貢納民でも費雅喀（満洲語では Fiyaka），奇勒爾（同じく Kiler），庫頁（同じく Kuye）と呼ばれた人々は独立性が高く，彼らからは満洲八旗の編成は行われなかった。そして，この「赫哲」が清朝崩壊後松花江下流に暮らす漁業や狩猟業で暮らす特定の人々に限定されて適用されるようになり，それが現在の政府が行った民族識別工作で採用されたのである。

現在の民族区分は国家ごとに行われるために，ナーナイと赫哲族の間には国境が横たわっている。しかし，清代の赫哲という住民の範囲は現在の国境には全くよらずに設定されたことはいうまでもない。赫哲という名称が指し示す集団範囲の細かい変遷については別稿に譲りたいが，それには 17 世紀後半のロシアと清とのアムール川の領有をめぐる武力紛争と，その対策として 18 世紀前半までたびたび行われた清による八旗編成とが大きく関わっている。そしてその変遷には住民の移動や移住も反映されているが，それと同時に清の支配の広がり具合も反映されていた。すなわち，文書

編纂者が住民分類の際に着目した文化的要素の分布，あるいは彼らの行政的な地位の相違と変化も反映されていたのである。例えば，18 世紀初頭に楊賓は『柳邊紀略』において当時松花江河口からゴリン川河口あたりまでのアムール川沿岸にいた住民を，頭部に剃りを入れるか入れないかの相違から剃髪黒金と不剃髪黒金に分類した（楊 1985: 251）。同様の分類を 19 世紀後半に曹廷杰が『西伯利亜東偏紀要』で短毛子と長毛子という形で行っている（曹 1985: 2283–2285，注 9 も参照）。しかし，二人が設定した両者の境界は大きく異なっており，曹廷杰は楊賓より遙かに下流に設定した。かつて北方史研究の泰斗，洞富雄などは剃髪黒金と短毛子をナーナイ，不剃髪黒金と長毛子をウリチであると比定して，楊賓と曹廷杰の相違を，ナーナイがウリチを圧迫して領域を下流に押し広げた結果であると解釈したが（洞 1974: 74–77），それは誤りである。両者の相違は満洲風の頭を剃る習俗が下流まで普及し，かつての不剃髪黒金までが頭を剃るようになったことを表していた。そのことは，17 世紀から 20 世紀初頭までのナーナイのハラ（氏族）の分布と居住範囲を丹念に追跡することでわかる（佐々木 1990a: 700–701, 746–753）。三つ編みにした髪の毛の周囲に剃りを入れる髪型（弁髪）を採用することは清朝支配下の社会では非常に重要なことであった。それは満洲人による支配を受け入れ，自らをそれに近い存在，そして清帝国の一員であると意識することを意味したからである。清は中国支配を始めた当初から有名な「薙髪令」を出して，漢民族にも弁髪を強制した。それは「頭を留めんとすれば髪を留めず，髪を留めんとすれば頭を留めず」（細谷 1999: 326）ということわざに表れるように過激なものだったともいわれる。しかしその一方で，頭を剃る弁髪は清の支配の拡大とともに，満洲，モンゴル，漢民族以外にも普及し，回族などでは清朝に功績があるものに許される名誉の象徴になっていたともいわれる（細谷 1999: 326–327）。漢民族には死をもって強制した弁髪も，アムール川流域では自主性に任せていたようで，それを採用するということは社会全体が清の権威に依存するようになっていたことを意味していた[11]。

巨視的に見れば，この地域では言語や物質文化をはじめとするさまざまな文化要素の分布範囲が異なっており，どの要素に着目するかによって，集団分類の境目はどこにでも引けるような状況だった。言語と文化を総体的に見れば，徐々に変化しつつも連続的につながっているように見え，結局松花江とウスリー川からアムール川河口まで，一つの大きな文化的な連続体をなしていたともいえる（この問題については，佐々木（2001; 2011）に詳しい）。しかもこれらの 3 大河川は決して集団や文化の境界とはなり得ず，むしろ両岸に同じ集団，同じ文化が分布していた。したがって，河川

に沿って国境を引くことは同一集団を分断する結果となった（佐々木 2013: 35–38）。

19 世紀半ばにこの文化的連続体の中に国境がひかれて，それ以後の 150 年間，この 3 つの河川の流域の人々は国境を挟んで異なる歴史を歩んできた。しかし，ここでいくつか疑問が浮かび上がる。すなわち，彼らにはずっと国境を越えて相互に同じ「民族」と呼ばれる集団に所属しているという意識を持ちづけてきたのだろうか。それとも，相互に通信，情報交換ができなかったこの 150 年の間に，本当はそのような意識は消滅し，研究者たちが本来同族だったと主張するから，再びそのような意識を持つようになったのだろうか。

この問いに対する解答を得るのは非常に難しい。ただ，相互に情報がない中でも，国境の向こうに同族がいる，かつて親族だったものがいるということを信じてきた一部の人たちがいたことは事実である。その一つが本稿で取り上げようとしているゲイケル・ハラの人々である。このハラ出身の人々は松花江流域からアムール川本流域の様々な村落に現在も暮らしているが，中国側では黒竜江省佳木斯市に属する敖其という村に多く暮らし，ロシア側ではハバロフスク地方コムソモリスク地区ニージニエ・ハルビという村にまとまって暮らしている。筆者は 1990 年にロシア側の人々と初めて出会い，彼らから自分たちが遙か上流，松花江方面から移住してきたという伝承を持つことを聞いた。そして 2012 年に中国側での調査で松花江流域にいた人々と出会った。敖其村での調査は，筆者にとってはミッシングリンクの発見になった。本稿の執筆は，この出会いが契機となっている。本稿ではロシアでの出会いから中国での出会いまでの 20 年の間に筆者が調べたゲイケル・ハラに関する記述を含む文献と，彼らが暮らす両村の博物館の展示，さらにハバロフスクや哈爾浜（ハルビン）などの都市に設置されている博物館の展示から，このハラの人々が持つ文化を中心として，赫哲族＝ナーナイの人々の文化表象のあり方と歴史意識を読み解き，さらにそれを民族学博物館の文化展示にどのようにいかせるのかというところまで考えていきたい。

3　ゲイケル・ハラの軌跡――中国側の記録より

ハラ（満洲語 hala，ナーナイ語 хала）とは満洲，赫哲族，ナーナイを初めとする東北アジアの満洲＝ツングース系の諸民族に共通に見られる父系の単系出自集団である。日本語の氏（ウジ），あるいは氏族に相当する（この言葉は日本語のハラカラ，ウカラ，ヤカラといった言葉と共通の語根を持つと思われる）。類似の言葉にムクン（満洲語 mukūn，ナーナイ語 мукун）というものもあるが，通常ムクンはハラの下位

組織あるいは下位集団とされる。ハラは「ゲイケル」のように独自の名称を有しており，それは原則父から子へと受け継がれる。したがって，同じハラ名を名乗る人々は同じハラの一員であるとされる。しかし，古い歴史を持つハラの場合には，相互に系譜関係を確認できないほど成員同士が離れている場合も多い。異なる言語を話し，異なる文化を持つ人々の間でも同じハラ名を共有する場合もあり，近世以後では複数の地域集団や民族にまたがるハラも存在した。また，赫哲族とナーナイの中で最も人口が大きいハラであるベリディ（Beldy/Бельды 古くはビルダキリ Bildakiri と呼ばれた）の場合には，親族関係がないにもかかわらず，ある時代に同じ村に住んでいた人々が清朝の役人によって行政的にベリディというハラにくくられてしまって，ベリディ・ハラを名乗るようになったというケースもある（1990 年にダイェルガ村で筆者自身が行った聞き取り調査による）。ゲイケル・ハラの場合には古い歴史と広範囲の人々と含む集団であるが，成員たちは相互に系譜的なつながりがあることを信じているようである。

このハラの来歴については民国時代に編纂された地方志である『依蘭縣志』の「人物門世族」という項目から概略を知ることができる（依欄縣志 1921（1974）: 147–148）。それによれば明の万暦年間（16 世紀末から 17 世紀初頭）にニヤフトゥ（尼雅胡圖）という人物が，徳新という村を中心に勢力を広げ，その孫のソソコ（索索庫）の代となって，三姓地方（現在の哈爾浜市依蘭鎮）から烏扎拉地方（詳細は不明だが現在のロシア領ハバロフスク地方アムール地区のあたりか）までの人々の「総部長」に推挙されて，清から「國倫達」に任じられたという。そして，初代から 13 代までの簡単な系譜と事績が記されている。しかし，初期の時代の記述に関しては他の資料による裏付けができない。

歴史学的に実証できるこのハラの来歴は 17 世紀の初頭からである。清朝初期の記録である『満文老檔』第 4 巻（太宗 1）の 1628 年（天聡 2 年）正月の項目に，「二十六日に東方 Geikeri 國の四人の大人が四十人を率ゐて Han に叩頭しに来た。來朝の禮として酒宴を張り，各人に緞の朝衣を一着ずつ與えた。」（満文老檔 IV（太宗 1）1959: 116）[12] という記述が見られる。これがゲイケル・ハラの歴史へのデビューである。その 7 年後の 1635 年（天聡 9 年）正月にはこのハラの首長であるソソコ（索瑣科）という人物が朝貢に現れている。このソソコはおそらく『依蘭縣志』「人物門世族」に登場するソソコ（索索庫）と同一人物であると考えられる。その後このハラの人々は，1637 年（崇徳 2 年）2 月，38 年（崇徳 3 年）11 月，40 年（崇徳 5 年）正月，41 年（崇徳 6 年）12 月，43 年（崇徳 8 年）2 月と続けて来朝したことが，清の大宗（ホ

ンタイジ）の治世を記した公式記録である『清実録』（太宗実録）に見られる[13]。

ソソコの 2 代後のコリハという人物は，1643 年から 89 年まで続く清とロシアの間のアムール川流域での勢力争いによる紛争の中で，清側について活躍したことが知られている。彼の活動の様子は『清実録』と『礼科史書』と呼ばれる檔案に垣間見ることができ，特に後者によれば，1653 年（順治 10 年）に当時「使狗地方」[14] と呼ばれたウスリー川との合流地点より下流にいた人々の 10 のハラ（ゲイケル・ハラと同じような集団）からクロテンの毛皮を貢納品として集め，その地域の代表者を寧古塔[15]，さらには盛京[16] まで連れてきて，清朝への服属を誓わせたという（清代中俄關系檔案資料選編 1981: 2–7; 佐々木 1990a: 689–690）。前年の 52 年に清は E・ハバーロフに引き入れられたロシアコサックの拠点であるアチャン要塞（アムール川左岸にあるボロン湖の出口近くにあった場所，現在はロシア領ハバロフスク地方アムール地区）を攻撃して敗北しており（ДАИ том3 1848: 365–366; 清実録三 1985: 537），その周辺の住民は大きく動揺していた。そのときにあえてゲイケル・ハラの首長はその要塞周辺の住民に清側に服属することを呼びかけ，成功したのであり，清側からみればその功績は大きかった。

『依蘭縣志』ではソソコの代で三姓，今日の哈爾浜市依蘭鎮あたりに勢力を移したとされているが（依蘭縣志 1921（1974）: 147），歴史学的に実証できる限りではコリハが首長をしていた時代だったらしい（松浦 2006: 314）。そしてコリハの息子のジャハラ（扎哈拉）の代に至って，この一族は満洲八旗に編入される。清末に編纂された『吉林通志』（巻六五）によれば，彼は 1714 年（康熙 53 年）に，できたばかりの三姓駐防八旗の正黄旗の佐領（満洲語では niru ejen または niru janggin，将校，兵，後方支援要員を含む 300 人の成人男子からなる集団とその家族，従者等からなる一群の人々を統率する長）に任じられている（吉林通志 1891（1986）: 1032）。彼は「世管佐領」といってその地位を子孫に代々受け継がせることができる地位を与えられた（三姓駐防八旗正黄旗世管佐領の一覧は表を参照）。このとき，ゲイケル・ハラ以外にも，もともとアムール川流域やウスリー川，松花江下流にいたルヤラ・ハラ（Luyara hala），フシハリ・ハラ（Hūsihari hala），シュムル・ハラ（Šumur hala）の 3 つの一族がそれぞれ鑲黄旗，正白旗，正紅旗のニルを結成し，その首長が世管佐領に任じられている（吉林通志 1891（1986）: 1032）。ちなみに，依蘭鎮の旧称は三姓（満洲語では Ilan hala）といい，その 3 つの姓とは，ゲイケル，ルヤラ，フシハリの 3 つを指すといわれる。シュムルを除くこれらの 3 つのハラは，「上三旗」と呼ばれる鑲黄旗，正黄旗，正白旗を結成し，その首長が佐領となっている。これはこの 3 つのハラが，三

表　三姓正黄旗世管佐領（ゲイケル・ハラ一族が世襲した佐領）

（吉林通志 1891（1986）: 1032–1041）

名前	在任期間（年号）	在任期間（西暦）	父子関係	備考
1 扎哈拉	康熙 53 ～ 58	1714 ～ 1719	コリハの子	「由徳新赫哲部落葛依克勒氏哈賚達編入，世管」（吉林通志 1891（1986）: 1032）
2 阿穆奇喀	康熙 58 ～雍正 9	1719 ～ 1731	扎哈拉の子	『依蘭縣志』では阿瑪奇喀とする。「雍正九年，特旨派招撫霍爾佛闊八姓人丁帰旗當差着有勤勞，奉旨賞穿黄馬褂留京充一等侍衛」（依蘭縣志 1921（1974）: 148）
3 杜爾郊	雍正 9 ～乾隆 14	1731 ～ 1749	阿穆奇喀の子	『三姓檔案』に出てくる正黄旗驍騎校 Ibugene の上司
4 伯都	乾隆 14 ～ 15	1749 ～ 1750	杜爾郊の子	乾隆 15 年に革去（罷免）
5 董薩那	乾隆 15 ～ 28	1750 ～ 1763	阿穆奇喀の子	『赫哲族簡史』によれば，父は阿木奇卡という。阿木奇卡は阿穆奇喀あるいは阿瑪奇喀と同一人物だろう。
6 六十七	乾隆 28 ～ 56	1763 ～ 1791	董薩那の子	
7 西郎阿	乾隆 56 ～ 58	1791 ～ 1793	六十七の子	
8 嘎爾善	乾隆 58 ～嘉慶 7	1793 ～ 1802	西郎阿の子	
9 瑪爾洪	嘉慶 7 ～ 17	1802 ～ 1812	嘎爾善の子	
10 西勒胡蘭	嘉慶 17 ～ 24	1812 ～ 1819	瑪爾洪の子	
11 富珠哩	嘉慶 24 ～道光 21	1819 ～ 1841	西勒胡蘭の子	
12 慶思	道光 21 ～咸豊元	1841 ～ 1851	富珠哩の子	
13 慶恩	咸豊元～光緒元	1851 ～ 1874	富珠哩の子	
14 訥蘇肯	光緒元～ 11	1874 ～ 1884	慶恩の子	

姓駐防八旗の中で重要視されていたことを示している。

『依蘭縣志』によれば，ジャハラの子孫からは宮廷で一等待衛に昇進するものが輩出した。例えば，ジャハラの子の阿瑪奇喀（『吉林通志』では阿穆奇喀とする。佐領在任は 1719 ～ 1731 年）は 1731 年（雍正 9 年）に七姓地方[17] に派遣され，満洲八旗への編成のための調査を行った。そして，その功績を認められて，一等侍衛となった[18]。彼の子供の杜爾郊（佐領在任 1731 ～ 1749 年）と董薩那（同 1750 ～ 1763 年）は相次いで正黄旗佐領の職を継いだ。『赫哲族簡史』によれば，董薩那はその忠勤を認められ，1761 年（乾隆 16 年）に自身が「中憲大夫」なる称号を与えられるともに，妻，父母ともに顕彰された「奉天誥命」なる書を下賜された。これは彼の子孫たちに受け継がれ，現在は依蘭鎮文物管理所に収蔵されているという（《赫哲族简史》编写组 1984: 112–114）。

図 3　全亮，舒連喜の記述があるパネル（敖其村の博物館にて，2012 年筆者撮影）

清朝末期には 12 代目の富明阿が三姓協領（協領は満洲語では gusa i da といい，三姓の役所である副都統衙門では副都統に次ぐ地位）を務め，また彼の同族の全亮は最後の三姓副都統（副都統とは満洲語では meiren i janggin といい，三姓副都統衙門の長官）だったという（依蘭縣志 1921（1974）: 148）。全亮については，敖其村の博物館で興味深い解説パネルを見つけた。この博物館の 2 階に，この村あるいは近隣の地域にいた赫哲族出身の名士たちの略歴が紹介されたパネルがあったが，その中にゲイケル・ハラの始祖であるニヤフトゥ（尼雅胡図）やソソコ（索索庫）と並んで（ニヤフトゥとソソコの紹介記事は『依蘭縣志』の記述とほぼ一致していた），「葛依克勒・全亮（1847–1922）」という人物が紹介されていた。彼は『依蘭縣志』に登場する全亮である。その記述を引用すると，「三姓副都统。祖居乌苏里江口的德新部落，始祖为尼雅胡图。在抗击沙俄入侵的战斗中，身负重伤。人们为表彰他的御敌功绩，赠送“望重东陲”的匾额，悬于私邸。」（三姓副都統。祖先はウスリー川河口近くの德新村出身で，始祖は尼雅胡図という。帝政ロシアの侵略に抵抗する戦いの中で重傷を負う。人々はその功績を表彰し，「望重東陲」の額を贈り，その私邸に掲げられていた）とあり，ロシアの東北地方侵略に際して果敢に抗戦して重傷を負ったというのである（図 3）。

ロシアの侵略と戦った人物については「舒连喜（?–1900）」（舒連喜）という人物も紹介されている。パネルには「世管佐领兼三姓练马步营总。八国联军攻陷北京后，沙

俄企图独占东北，舒连喜率众阻击敌人，壮烈殉职。死后清廷恤赠云骑尉职世袭，其灵牌后供祀于昭忠祠内。」（世管佐領兼三姓練馬歩営総。8 ヶ国連合軍による北京攻略の後，帝政ロシアが東北地方独占を企てたとき，舒連喜は兵を率いて敵軍に攻撃を仕掛け，壮烈な戦死を遂げた。清の宮廷は死後，雲騎尉の職を追贈して世襲とし，その位牌を昭忠祀の中に祭った）と記されていて，1899 年から 1900 年にかけて義和団事件から北清事変へと騒乱が拡大して，帝国主義 8 ヶ国による北京占領，ロシアの東北地方侵略と厳しい情勢が続く中で，佐領そして軍の将校として兵を率いて戦い，戦死したという。

全亮が負傷し，舒連喜が戦死したロシアとの戦いについては『依蘭縣志』の政治門兵事という項目の中で若干触れられている。それによれば，「光緒二十六年。七月初三日。俄人入寇輪船數十艘。至依城東北白哈達一帶。―中略―　先是護理副都統儂英阿，派統領全亮。左司佐領英林。営總佐領連喜。會同金鑛總辦宋春鰲。共率兵勇三百餘名。紮於倭和江（即倭肯河江乃古名也）右岸相距僅里許。該統領等雖奮勇於槍林彈雨之中。究因寡不敵衆。槍礮不精。陣亡八十餘名。―後略―」（光緒 26 年 7 月 3 日，ロシア人が船数十艘に乗って侵攻し，依蘭城東北白哈達一帯に至った。―中略―　それに対して護理副都統の儂英阿が統領の全亮，左司佐領英林，営總佐領連喜，金鑛總辦宋春鰲を派遣し，兵士 300 余名を率いて倭和江（肯河江の旧称）の右岸の敵陣より僅か 1 里ばかりのところに布陣した。統領全亮らは槍が林立し，砲弾が雨あられと降る中奮戦したが，衆寡敵せず，圧倒的な武力の前に，80 余名の戦死者を出した。）（依蘭縣志 1921（1974）: 51–52）（下線筆者）とあり，全亮と舒連喜が 1900 年（光緒 26 年）の北清事変に際して松花江流域の三姓近郊で生じたロシア軍との戦闘に参加していたことがわかる。全亮はそこで負傷し，舒連喜は戦死してしまったのである（なお，この戦闘については『清実録』（徳宗景皇帝実録）にも『三姓檔案』にも該当箇所は見当たらない）。全亮が最後の三姓副都統となったのは 1909 年（宣統元年）であることから，このときの奮戦が評価されたのかもしれない。舒連喜は舒が姓であるとすると，シュムル・ハラの出身である。彼はゲイケル・ハラと共に満洲八旗に編入されて正紅旗の世管佐領となったシュムル・ハラの有力者の子孫なのかもしれない。

三姓副都統衙門が廃止され，依蘭県が設置されると，副都統衙門と正黄旗という八旗組織に依拠したゲイケル・ハラの人々は三姓の地を去り，当時隣の樺川県側にあった敖其に安住の地を求めた。村の博物館のパネルによれば，そこは風光明媚なところで，漁具の鉤を意味する赫哲語の言葉から「敖其」（aoqi）という地名を付けたという。

しかし，その後のつかの間の平穏は日本軍の侵略によって再び破られる。博物館の

パネルには「葛魁祥（1894–1936）」という人物が紹介されている。姓が葛であることからゲイケル・ハラの一族である。その説明には，「赫哲族族长。1894 年生于敖其村，曾担任部族长。1936 年，在抗击日本侵略者的斗争中，日寇派特务暗杀了他，牺牲时年仅 42 岁。」（赫哲族の族長。1894 年敖其村生まれ。部族長を受け継いでいた。1936 年，日本の侵略者に対する闘争中，日本の特務機関によって暗殺される。時に 42 歳。）とあり，1931 年の柳条湖事件に始まる日本の本格的な東北侵略に対して，地元の族長として抵抗運動を指導する中で，1936 年に日本の特務機関に暗殺されたという。

そのほか，ゲイケル・ハラ出身で歴史資料に登場する人物としては『三姓副都統衙門檔案』の乾隆 8 年（1743 年）2 月 29 日付けの文章に登場する正黄旗驍騎校の Ibugene，そして間宮林蔵が口述し，村上禎助が筆記した『東韃地方紀行』に登場する撥勒渾阿という人物がいる。前者は，ゲイケル・ハラの族長（当時は佐領 3 代目の杜爾郊（トルヒオ）だった）が世管佐領となっている三姓駐防の正黄旗の驍騎校（驍騎校は満洲語で funde bošokū といい，佐領の副官にあたる）だったということで，ゲイケル・ハラの一族か，出身は異なるが，その中に取り込まれた可能性がある人物である。彼はニヴフ語と推定されるフィヤカ語や，ウイルタ語かエヴェンキ語と推定されるオロンチョ語（またはオロチョン語）と満洲語との間の通訳ができたようで，ネルチンスク条約締結の翌年に当たる 1690 年（康熙 29 年）に清朝がフィヤカ（現在のニヴフとウリチの祖先に当たる）の人々に対する支配を本格的にはじめた時以来，生涯に 38 回も樺太に渡り，清朝の樺太経営に貢献した（三姓副都统衙门满文档案译编 1984: 132）。

後者は日本人と出会った数少ないゲイケル・ハラ出身者である。1809 年に樺太（サハリン）からアムール川へ渡った間宮林蔵はデレンの「満洲仮府」まで探検した。そのときデレンで出会った 3 人の「上官夷」の一人に葛姓（ゲイケル・ハラ）で鑲紅旗驍騎校の職にいた撥勒渾阿がいた。彼は 3 人の中ではナンバー 2 だった。そのときの最高責任者は正紅旗世管佐領で舒姓（シュムル・ハラ）の托精阿[19] という人物で，ナンバー 3 の人物は正白旗筆帖式（満洲語の bithesi の当て字で，書記を意味する）で魯姓（ルヤラ・ハラ）の沃勒恒阿と名乗った。間宮林蔵が出会った上級役人はすべて三姓という地名の元となるハラの出身者である。林蔵は彼らが乗ってきた船に招かれ，その中で酒席の接待を受けている。おそらく漢文を使って筆談をしたのだと考えられるが，そのために林蔵は中国の内地から来た人と勘違いされた（間宮 1810: 136–147）（図 4）。

このように，ゲイケル・ハラの人々は清朝興隆期からその歴史に登場し，しかも時

図 4　デレンの満洲官吏が暮らす船の中で接待を受ける間宮林蔵（『東韃地方紀行』中巻（国立公文書館所蔵）より）。左端の帽子をかぶった人物が撥勒渾阿と思われる。

代を画すような活動を行い，多くの個人名を史料に残した。彼らが赫哲族なのか，ナーナイなのか，それとも満洲（清朝時代には赫哲その他の毛皮貢納民の集団から満洲八旗に編入されたものは新満洲 ice manju と呼ばれた）なのか，議論が分かれるところではあるが（詳しくは佐々木（1994）を参照），少なくとも中国，ロシア，日本で紹介される赫哲族やナーナイに関する民族誌でしばしばいわれてきた「未開の狩猟採集民族」というイメージとは相容れない。それが博物館の展示とからめるとどのような議論になるのかについてはまた後で詳しく述べる。

4　もう一つのゲイケル・ハラ――ロシア側の記録と記憶より

ゲイケル・ハラは中国領内だけにいるのではない。筆者が最初に出会ったゲイケル・ハラ出身者はロシア側にいた人々だった。現在，彼らはナーナイという民族の一員とされている。筆者が出会ったのはコムソモリスク・ナ・アムーレ市とニージニエ・ハルビ村（Нижние Халби）で，前者は大都会でアムール流域の村落からの流入者が多いが，後者はナーナイ民族出身者を主要な住民とする村である。両者ともナーナイの居住地域としては比較的下流に位置する。1960 年代から進められてきた村落統合によって，これらの町や村よりも下流にいたゲイケル・ハラの人々はほとんどがコムソモリスク・ナ・アムーレ市かニージニエ・ハルビ村に集まっていると思われる。

しかし，それ以前にはもっと多くの村に分散して暮らしていた。

ロシア側のナーナイの文化，社会について詳しい調査研究を行ったアンナ・スモリャーク（A. B. Смоляк）は，ゲイケルというハラはその形成過程において比較的均質な集団であると述べている。彼女によれば，19 世紀中期から末期にかけては，アムール川の下流（ピッソイ村，ホミ村など）の他，アニュイ川とその河口付近（ダダ村，イェルガ村など）にいた。しかし，下流にいるグループもアニュイ川からの移民であると意識しているという（Смоляк 1975: 129）。その情報を裏付けるのは，1897 年に行われた第 1 回ロシア帝国国勢調査の結果である。それをまとめたセルゲイ・パトカノフ（C. Патканов）によると，当時このハラに属していると答えたのは 238 人（男 132 人，女 106 人）で，ホミ（Хоми），アジ（Ади），ピッソイ（Писсой）などのアムール下流方面の村に居住するものが 131 人（男 68 人，女 63 人），ダイェルガ（Даерга），イェルガ（Ерга），ダダ（Дада）など比較的上流にいるものが 72 人（男 48 人，女 24 人），上流方面の右岸に注ぐ支流であるアニュイ川流域にいるものが 18 人（男女とも 9 人ずつ）だった（Патканов 1906: 61）。さらにアニュイ川流域にいた 18 人のうち 10 人はサラ Сара あるいはシラ Сира という村の居住者だった。

このサラあるいはシラという村は，元々はもっと大きな村で，18 世紀末の三姓副都統衙門の檔案にも登場する。そこにはこの役所が取り扱ったアムール川流域と樺太（サハリン）からの毛皮貢納者の一覧表が含まれており，樺太だけの分については 1743 年（乾隆 8 年）から 1777 年（乾隆 42 年）まで 4 件，アムール川も含むこの地域全体の一覧表については 1791 年（乾隆 56 年）から 1873 年（同治 12 年）の分まで 12 件が残されている。この一覧表に，ゲイケル・ハラのシラ・ガシャン（Sira gašan，ガシャン gašan とは満洲語で村を意味する）の 15 戸（代表者は穿袍人 sijigiyan eture のトゥルヒナ Tulhina）と 16 戸（代表者は村長 gašan da のリオゲ Lioge と穿袍人のキラ Kila）のグループがそれぞれ 15 枚と 16 枚のクロテンの毛皮を貢納し，15 戸分と 16 戸分の恩賞を受け取ったという記録が残されている[20)]。この記録は 1791 年から 1873 年までほぼ変わらないことから，実態に即さず，役人が機械的に記述したものと考えられるが，乾隆年間（1736 年～ 1795 年）では比較的実態に近いものと想像されている。このシラ・ガシャンがロシア側のいうサラ村（あるいはシラ村）に相当する。19 世紀末にはたった 10 人しか残っていなかったこの村も，それより 100 年前には合わせて 31 戸もの住民がクロテンの毛皮を貢納し村長 1 人，穿袍人 2 人がいた。31 戸というのはクロテンを支払う家の数であることから，最盛期には実際の戸数はもっと多かったかもしれない。三姓檔案ではこの村以外にはゲイケル・ハラの人々は

登録されていない。

ここから想像されるのは，三姓周辺にその拠点を移したゲイケル・ハラの人々の一部がアムールを下流に下り，アニュイ川に入って 18 世紀中期にシラ・ガシャンを中心とする一帯に住み着いた。しかし，そこも暮らしにくくなり，アムール本流に出てさらに下流に移っていったということである。しかし，アニュイ川への移住とアニュイ川からの移住がいつの時代のことなのか，アニュイ川流域に寄らずに，直接下流に行った人々がいたのか，そしてそれがいつのことなのかなど，謎は多い。

筆者がニージニエ・ハルビで行った調査（1990 年，97 年，98 年）では，下流にいるゲイケル・ハラの人々は元々松花江（スンガリー）の方面にいて，いつの時代にか下流に移住してきたのだというのである。ただ，下流方面にいるゲイケルの人々は，その土地にかなり強く根付いている。例えば，ニージニエ・ハルビより下流の右岸にアジ（Ади）というところがある。そこにはかつて比較的大きな村があり，現在のニージニエ・ハルビのゲイケルのほとんどは実はこのアジ村の出身であるという。1897 年の国勢調査を見ると，この村には男 41 人，女 45 人，計 86 人の「ゴリド」（ナーナイ）が登録されていたが，そのうち男全員と女 41 人の計 82 人がゲイケル・ハラのメンバーだった（Патканов 1912: 961, 968）。つまり，この村はアムール下流のゲイケル・ハラの一大拠点だった[21]。

現在この村は廃村となっていて誰も住んでいない。しかし，ニージニエ・ハルビ村に暮らす子孫たちは，アジの対岸にある巨岩に関する伝説を持っている。その巨岩は 19 世紀には中国でも知られていて，1885 年（光緒 11 年）にロシア領になってしまったアムール川を密かに調査した曹廷杰は，「阿吉大山」と呼んで，ランドマークとしている。そして，ここを赫哲喀喇（短毛子）と額登喀喇（長毛子）との境界とした（曹 1885（1985）: 2283, 2285）（図 5）。

それよりも 30 年前の 1854 年から 56 年にかけてまだ中国領だったアムール川流域に関する体系的な民族調査を行ったシュレンクは，アジ村をオリチ，すなわち現在のウリチの最も上流の村であると述べている（Шренкъ 1883: 27）。したがって，そこでシュレンクが出会ったのはゲイケル一族ではなかったのかもしれない。あるいは彼らがあまりにもウリチに近い習俗に変わっていて，そのように判断した可能性も否定できない。というのは，彼はアジ村のすぐ上流隣の村チウチャ（Чіуча）にはゴリド（ナーナイ）が住むとしていたからである（Шренкъ 1883: 29）。さらに同じ時代，まだ江戸幕府がサハリン南部を実質支配していた 1856（安政 3）年に，幕府がサハリン南端の白主会所にやってきたサンタン人（大陸側のウリチ，ニヴフらを当時の日本は

図 5　アジの対岸にある巨岩（2001 年筆者撮影）

このように呼んだ）に対して行った聴取の結果では，この村は「アリ」と記録され，「コルデッケ」（日本側のゴリドすなわちナーナイに対する名称）の村とされている（東京大学史料編纂所 1922（1972）: 128）。したがって，このアジ村のあたりはナーナイとウリチが混在していたか，どちらとも判断が難しい人々が暮らしていたと考えられる。

それが何を意味しているのかを深く知るための史料はない。というのはシュレンクも幕府史料も，アジ村の人々のハラについてまでは言及していないからである。すでにシュレンクが調査するまでの時代にゲイケル・ハラの人々がこの地域にまとまって住むようになっていた可能性もあるが，シュレンクの調査以降に移住してきて急速に人口を増やしたという可能性もある。確実にいえるのは，この地域がウリチとナーナイの境界地域に当たり，両者が混住していた可能性が高いことと，ゲイケル・ハラの人々がアジ村にまとまって住むようになったのを確認できるのは 1897 年以降だということである。

16 世紀末にウスリー川の河口近くにあったと考えられている徳新という村から興隆して，アムール川中流域から松花江流域にかけて勢力を広げたゲイケル・ハラは，19 世紀末までにナーナイ，赫哲族の分布の最も上流の部分（三姓）と最も下流の部分（アジ）を押さえていたということになる。果たして，このナーナイの領域の両端

に暮らしてきた人々が本当に元「同族」だったのだろうか。

すでに 1990 年代の調査で，アムールの下流にいるゲイケル・ハラの人々が，松花江方面から移住してきたらしいという伝承は確認していたが，2012 年の敖其村での調査で，この村のゲイケル・ハラ出身の村長から，自分たちの一族には下流に移住していったグループがあったという伝承を聞くことができた。彼の説明によると，かつて 8 人の兄弟がいたが，そのうちの 5 人が松花江に残り，3 人は下流へ去って行ったという（松花江に残った 5 人の兄弟のうち，4 人の子孫は今でも敖其を中心に中国側で暮らしているという）。したがって，ニージニエ・ハルビで聞いた伝承と見事に符合するのである。ただし，それがいつの時代だったのかはいずれにしてもわからなかった。松花江に残った人々は満洲や漢族らの族譜を残す伝統を取り入れて，1906 年（光緒 32 年）に見事な族譜を作成した（葛氏家譜）。したがって，それをたどって祖先の名前を確認すれば，下流へ分かれていった人々がどこに位置するのかはわかるだろう。しかし，下流へ行き，帝政ロシア，ソ連，そしてロシア連邦という国の中で生きてきた人々には族譜を書き残す習慣はなかった。祖先の名前は記憶や伝承に残されるだけだが，それは 100 年以上に及ぶロシア，ソ連の支配の中でほとんど消えかかっている。そのために，両者の伝承を文献史料で実証するのは相当な困難を伴うと考えられる。

5　敖其村の博物館

ゲイケル・ハラの人々が暮らす敖其は現在佳木斯市の市域にある一つの村とされている。この村には 103 世帯，326 人の赫哲族の人が住んでいるとされる（2008 年の数字，敖其村の村長の情報による）。佳木斯市の中心部より西に 20 キロメートルほど離れた松花江の右岸にある集落だが，近年少数民族の生活改善と観光による増収を目的として赫哲族だけの新しい集落（観光集落）が建設されつつある。そこにこの村の赫哲族の文化と歴史を紹介する博物館が設置されている。

敖其村の博物館の正式名称は「中国・佳木斯赫哲族文博馆」（中国・佳木斯赫哲族文化博物館）という。敖其の観光村の敷地内にあり，鉄筋コンクリートの 2 階建ての近代的な建物である（図 6）。この建物の中には「佳木斯市郊区敖其村赫哲族鱼皮技艺传习所」（佳木斯市郊区敖其村赫哲族魚皮技術工芸伝習所），「佳木斯市郊区敖其村赫哲族伊玛堪传习所」（佳木斯市郊区敖其村赫哲族イマカン伝習所）と書かれた看板があり，また，博物館の建物と並んで儀礼用の建物があることから，ここでは赫哲族

図 6　敖其村の博物館の建物（2012 年筆者撮影）

の伝統文化の実践と次世代への継承のための活動が行われていることがわかる。

魚皮は伝統的な衣服の素材だったが，現在ではその独特の風合いを活かして財布やカード入れ，ポシェット，鞄，小物入れなどの実用的な製品が作られている。また，「魚皮画」という一種の切り絵が芸術作品として成熟していて，狩猟，漁撈風景や歳時記，あるいは子供たちの遊びといった伝統を表す作品だけでなく，虎や竜，鳳凰を描いたものや中国の神々や英雄といった中国国内の観光客の需要に応えようとする作品も数多く作られている。そのために，魚皮なめしからそれを使った作品を作るための技術，技能の開発と継承に力を入れている。イマカン（imakan，伊玛堪，伊瑪堪とも記される。アムール方言ではニングマ нингма と呼ばれる）とは独特の節をつけた語りである。それは中国の国家レベルの無形文化遺産として登録されていることから，赫哲族の音楽文化，口頭伝承文化としてやはりその普及と後継者育成が盛んに行われている。博物館の建物の中に両方の技能を教えるための施設が設けられているのは，この村でも魚皮とイマカンを赫哲族の特徴的な文化とし振興し，観光事業にも活かそうとしているということである。

エントランス部分には獲物を引いて帰路に就く狩人の姿を描いたジオラマと，結婚式の風景のジオラマが中央に据えられている。それを取り巻くように，展示が設置されている。展示は，近年の中国における少数民族関連の博物館で見られるように，歴

史展示と文化展示から構成されている。

展示スペースでは，まず赫哲族の先史時代から現代までの歴史を示す展示で始まる。この村はゲイケル・ハラの村だった関係で，この氏族の歴史を表す展示が中心である。年表は一般的な東北地方の歴史であるが，その横に「葛氏家族与敖其由来」（葛氏の一族と敖其村の由来）というコーナーがあり，ゲイケル・ハラの概括的な説明とその族譜（家譜）の写真が飾られ，族譜を元にして作製された系図がそれに続く（図7）。歴史展示は 2 階にもあり，そこにはゲイケル・ハラ出身の主要な歴史上の人物の伝記と敖其村にゆかりのある赫哲族出身の著名人（たとえばイマカンの名手として有名な呉明新氏など）の伝記が記されたパネルが並んでいる。

文化展示も 1 階部分と 2 階部分とに分かれている。1 階部分は大きく生活習俗と信仰とに分かれていて，前者には伝統的な衣服の他，狩猟漁撈用具と小物類が並び，後者にはシャマニズム関連の資料の他，木偶類，占い用具類などが並ぶ。2 階にも生活用具類の展示があり，漁撈用具（漁網や鉤，針など），狩猟用具（弓矢，槍，罠類，鉄砲など）が展示されている。それとともに，「猎产品交易」（狩猟産品の交易）と称して毛皮類の見本が展示されていたり，「渔产品交易」（漁業産品の交易）と称して船模型や魚の標本が並べられたりしているコーナーがあり，そして，現代工芸コーナーがくる。そこには「鱼皮文化」（魚皮文化），「桦皮文化」（白樺樹皮文化）として魚皮

図 7　葛氏家族与敖其由来（2012 年筆者撮影）

や白樺樹皮を使った作品が並べられるとともに，伝統衣装に使われてきた刺繍やその刺繍の文様を切り絵として作品化したものが展示されている。（図 8，図 9）

このような文化展示の構成は，ロシアの北方先住民族の村の博物館でも見られるものとほぼ同じである。ただし，展示されている資料は全体的に新しく，この博物館の開館に合わせて製作されたような資料も少なからず見られる。ロシア側では 19 世紀以来の資料をしばしば見ることができるのに対して，こちらでは少ない。それは，中国側が 19 世紀末以来古い，伝統的なものを破壊するような出来事をたびたび経験したことと関係するかもしれない。その間，ロシア側ではロシア革命後の混乱に乗じた日本軍を初めとする列強の干渉（1917 ～ 21 年），スターリン時代の強権的な社会主義体制確立と粛清，弾圧（特に 1930 年代後半～ 50 年代前半）など混乱の時代はあった。そして，第 2 次世界大戦時には多くの男たちがヨーロッパ戦線に出征して命を落とした。しかし，革命後の一時期を除いてはアムール川下流域の居住地が戦乱に巻き込まれることはなく，19 世紀以来の資料が散逸することは少なかった。そのために，博物館は古い，より伝統的な色彩をよく残した資料を手に入れることができた。それらはソ連政府が急速な社会主義的近代化を推し進めた結果，住民にとっては不要になったものである。ただし，少々意地悪な見方をすれば，博物館が「学問」の名の下に住民から取り上げたものも皆無ではない。ことに，シャマニズムや信仰関係の資料

図 8　1 階の生活習俗展示（2012 年筆者撮影）

図 9　2 階の魚皮画展示（2012 年筆者撮影）

については，「迷信」，「旧来の悪弊」という名目で人々から取り上げ，博物館に隔離してしまったという側面があったことは否定できない。

それに対して，中国側ではロシアの侵略，革命，日本の侵略，そして国共内戦と比較的遅くまで戦乱による混乱が続き，さらに文化大革命という著しい伝統破壊をもたらした運動も経験したために，古い資料が残りにくい状況にあった。また，生活の近代化，社会経済体制の社会主義化がソ連より遅れ，より近い時代まで伝統的な生活用具が使用されていたという事情もあった。そのために，実際に使われていた伝統的な生活用具でもより新しいものが博物館に納められることになった。しかし，現在では後発の中国側の方が，経済成長が著しく，資金も豊富になり，博物館施設が新設され，展示にも随所に新しい試みが見られる。

魚皮や白樺樹皮といった伝統素材を利用した工芸作品や，伝統的な文様を施した衣

装，あるいは周囲の自然や日常生活，口頭伝承のモチーフなどを題材にした絵画，彫刻などを民族芸術作品として展示するというのは，ロシアの博物館でも見られる。ロシアでも，民族学博物館の総本山であるロシア民族学博物館や人類学民族学博物館（通称クンストカーメラ，両者ともサンクトペテルブルクにある）から先住民族の村の資料館にいたるまで，民族芸術作品，民族工芸作品を積極的に収集し，展示に使っている。

ロシアではソ連時代に「未開」な狩猟採集民族を「文明化」するために，当時の少数民族に対して初等中等教育だけでなく，高等教育も提供した。その過程において多くの少数民族出身者が大学や専門学校等へ進学した。その中に伝統的な工芸品（木工，木彫，刺繍など）作成のための技術を習得するコースがあり（ロシア極東地域ではハバロフスク教育大学にそのようなコースがあり，筆者の共同研究者やインフォーマントも何人かがそこの出身である），そこを修了したものが，伝統に近代西欧的な様式を取り入れた工芸作品や美術作品を多く残した。ソ連時代には少数民族の文化振興政策の一環として，博物館や美術館がそれらを購入して常設の展示に出したり，特定の作家の作品展を実施したりしていた。しかしソ連崩壊後は，経済危機によってロシアに少数民族文化振興策を支持するだけの財政的な余力がなくなり，1990 年代から 2000 年代にかけて，そのような活動が下火になってしまった。2010 年代に入り，ロシア経済が回復するともに，1990 年代初期に結成された北方先住民族協会を中心に再び博物館を通じた芸術活動が復興しつつある。

しかし，村における工芸師や芸術家に対する待遇と市場のニーズに合わせた作品の広報と販路開拓という面では中国の方が先を行くことになった。それは国民の商業活動に対する意識と意欲の差が影響している。ロシアではソ連時代に結構活発な活動をしていたとはいえ，極東の先住少数民族の民族芸術に対する知名度や需要は，彼らが暮らす地域の中心地である地方都市でも必ずしも高いとはいえない。そのような状況では作品の売り上げや展示への貸し付けなどによる収入ではとても生活できない。特に優れた作家は欧米の支援を受けて海外で活躍するが，そうでない人々は村で狩猟，漁業，菜園農業などで食料を自給し，村に交付される先住民族に対する僅かな補助金や自分の年金（高齢者の場合）で生計を立てながら，ようやく活動を維持しているのが現状である。

それに対して，中国では「魚皮画」というジャンルが確立され，巧みな広報戦略によって，その知名度が中国国内でも高くなっている。制作者側も赫哲族の伝統的なモチーフだけでなく，顧客の大多数を占める漢民族の観光客にも喜ばれるような題材

（竜，虎，鳳凰などの吉祥動物や中国の神々，歴史上の有名な人物など）を取り上げた作品の制作にも積極的である。経済成長によって庶民も観光旅行を楽しめるようになった今日では，東北地方の「少数民族」の村は格好の観光資源とされており，そこで手に入るお土産として魚皮画を初めとする伝統的な工芸品が結構売れていくのである。そこには，おそらく「少数民族」や先住民族に対する国民の意識の違いも関係しているようである。それは下記のような少数民族の歴史に対する認識や意識ともつながっている。

6　少数民族の文化表象と歴史表象の諸問題

6.1　中国とロシアの民族文化に関する博物館展示の比較

敖其村の博物館に見られる中国の少数民族に関する博物館の展示とロシアの同様の博物館の先住民族文化に関する展示との決定的な相違点は歴史展示にある。

中国の場合では，少数民族についても漢文をはじめとする歴史文書を残した諸言語による数多くの史料があり，それを活用できるために，それに基づく分厚い歴史記述と歴史展示が可能である。赫哲族の場合でも，敖其村の博物館の事例に見られるように，中国史に登場する赫哲族の記述を紹介するコーナーが設けられている。ことにここの博物館の場合にはゲイケル・ハラ（葛氏）という，歴史に残る人物を多く輩出した一族が暮らした村の博物館だったために，特に詳しい。それ以外の村の博物館，例えば，四排村，街津口村，繞河鎮などの博物館でも敖其村ほど詳しくはないが，赫哲族の歴史が中国の文献に則って古代から現代まで紹介されている。少数民族の歴史をあくまでも「中国史」の枠組みの中でのみ捉えようとしている点には違和感と問題を覚えるが，それでも，少なくとも現代の諸民族の直接の祖先の記述が史料に登場し始める元代から現在までをつなげようとする試みには実証性があり，新しい試みとして評価できる。

博物館というものは往々にして展示内容のみならず，その存在そのものに政治性が含まれる。社会主義国では旧ソ連，中国ともにそれが強調されるきらいはある。例えば，赫哲族の村のいずれの博物館でも必ず日本の侵略時代（1931 ～ 45 年）に起きた日本軍の蛮行に関する資料の展示と解説パネルが見られる。しかし筆者の印象では，いずれの博物館でもことさらそれを政治的に誇張して主張しているようには見えなかった。例えば，四排村の博物館の展示では，日本の侵略に関する展示が 1850 年代

から 1900 年代にかけて起きたロシアの侵略と並べて展示されていて，海外からの侵略の事例として同等に扱われている。敖其村の博物館でも，ロシア軍との戦闘で戦死した人物と日本軍に暗殺された人物がともにパネルで紹介されていて，その扱いは同等である。歴代の王朝が歴史を現政権の正統性を保証するための装置として使い続けてきた中国では，歴史記述やそのヴァリエーションの一つである歴史展示には政治性が多分に含まれる。ロシア侵略史の展示は，観客に赫哲族の居住地がロシアとの国境地帯であることを意識させる装置であるとともに，アムール川流域が 1860 年まで清の領土だったという主張の裏返しでもある。そして現在の政治体制の確立につながる日本の東北地方侵略史と当時の赫哲族の人々の苦難についても大きく取り上げなければならない。しかし，そのようなことを考慮に入れても，赫哲族の村の博物館の侵略展示はまだ客観性と実証性を保っているように見える。

それよりも筆者が気になったのは，ロシアの事例とも共通する点だが，歴史展示と民族文化展示との間の不連続性と，歴史，文化いずれの展示でも見られる利用する資料，史料の偏りである。この 2 点ともに少数民族に関する歴史と文化が「中国史」と「中国の諸民族」という枠組みでしか捉えられていないことの現れであり，それに対応することはロシアにも共通する。しかし，この問題は中国，ロシアに限らず，日本，欧米を含む世界中の歴史学，人類学に共通するものでもあるので，また後ほど詳しく検討する。

ロシアの場合，先住民族や少数民族にもさまざまな人々がいるので，全体を包括してはいえないが，ことシベリア，極東の先住民族に関しては 19 世紀以来の進化主義的な人類学，民族学の名残とマルクス主義的発展段階論の影響で，彼らを歴史のない「未開」民族とする傾向は強い。したがって，帝政ロシアの支配下に入るまでは独自の歴史を認められていない。彼らが歴史を持つようになるのは，ロシア人と歴史を共有するようになる帝政ロシアの支配下に入って以降であり，特に革命と第 2 次世界大戦（大祖国戦争）の勝利こそが共有すべき歴史であると強調される。その歴史は博物館では「歴史展示」の中でロシア国家の歴史の一部として表象され，先住民族の文化の展示には歴史的な要素が全くない[22)]。

サンクトペテルブルクのロシア民族学博物館や人類学民族学博物館のように，多数の民族の文化（前者は旧ソ連領内の民族を，後者は全世界の民族をそれぞれ地域ごとに展示する）を一堂に展示しなければならない場合には，各民族の持つ歴史的背景を十分に展示することは不可能である。その場合には，各民族文化の中核あるいは本質となる部分を選び出して，その文化の特徴を強調するような展示にならざるをえない[23)]。

しかし，ハバロフスクやウラジオストーク，コムソモリスク・ナ・アムーレといった地方都市の博物館やニージニエ・ハルビのような村の資料館では，その地域の歴史と地域の先住民族の文化を展示すればよく，その範囲は限られているために，先住民族の文化も地域の歴史もじっくりと展示できるはずである。しかし，両者の間には連環が見られない。例えば，ウラジオストークとハバロフスクにはそれぞれかなり大きな郷土博物館と称する博物館がある。その展示は基本的に自然（動植物と鉱物），考古学，先住民族文化，そして地域の歴史の 4 つの部門で構成されている。しかし，考古学，先住民族文化，そして歴史がそれぞれ相互に繋がらない。しかも，先住民族たちの帝政ロシア時代以前の状況が展示には全く示されていない。それは考古学展示でも地域史展示でも扱われていないのである。それはロシアの考古学，歴史学，民族学の独自の問題ではあるだが，そこに中国や日本，欧米も含む世界的に共通する各分野の問題も潜んでいる。

6.2　歴史と文化のつながり

ここで，少数民族あるいは先住民族の歴史と文化の記述方法，あるいは博物館における展示方法について，考古学，歴史学，民族学に潜む問題点に着目しながら検討していこう。

博物館における少数民族，あるいは先住民族に関する展示において，歴史と文化を整合的，有機的につないで，文化を歴史的な文脈で捉え直し，歴史を文化的な文脈で捉え直すという相互作用を期待できる展示を実現している博物館は，管見の限りでは中国，ロシアともにまだないようである。日本でも先住民族アイヌに関する展示を持つ博物館は多数あるが，それは実現できていない。

日本のアイヌの場合を概観すると，北海道の考古学，歴史学，アイヌに関する人類学，民族学の各分野の研究はそれぞれ高度に発達しており，その成果は大きい。しかし，未だに考古学で使用される時代区分と概念（例えば，縄文文化期，続縄文文化期，擦文文化期，アイヌ文化期）と，アイヌ史研究で使われる中世アイヌ期，近世アイヌ期，近代アイヌ期といった時代区分と概念との関係性やつながりがきちん検討されていない。そして人類学や民族学が「伝統的」と命名してきた文化については，いつの時代のどの地方のものかという点が曖昧にされていることが多い。その最大の原因は，文書史料にアイヌの祖先が登場し始める 13 世紀から近代（20 世紀初頭）にいたる時代に関する考古学的な発掘データがまだ少ないことにある。つまり地面の下から出てくる時代を特定できる資料を，史料や伝世現物資料と比較対照することができな

い。近年 14 ～ 16 世紀と推定される遺跡の発掘事例も徐々に増えてきて，いわばミッシングリンクが発見されつつあるが，擦文文化とオホーツク文化からアイヌ文化へといかに移行したのかは，未だに曖昧模糊としている。

中国東北地方や極東ロシアでも似たような状況にあり，データの少なさについては北海道よりも事態は悪い。

ロシアでは，極東地域に関する考古学的な研究が盛んである。その最先端の成果はウラジオストークの極東大学博物館の考古学展示と沿海地方郷土博物館，そしてハバロフスクの郷土博物館の考古学展示によく示されている。いずれの博物館とも，人類進化史から始まり，前・中期旧石器時代，後期旧石器時代，新石器時代，青銅器時代，鉄器時代と古典的な時代区分に基づいて展示を構成している。ただし，新石器時代以後はその下位区分である「〇〇文化」（例えばアムール川流域ではオシポフカ文化，ウリル文化，ポリツェ文化など）ごとに展示が展開される。青銅器，鉄器時代に入るとこの地域では歴史時代に突入する。すなわち，中国の歴史書にこの地域の情勢が記載されるようになる。しかし，ロシアの考古学では先史時代とともに，歴史時代も考古学研究の対象となる。すなわち 3 世紀以降に史書に登場する挹婁，勿吉，靺鞨などの文化に相当する「靺鞨文化」，その靺鞨と高句麗の遺民が建国した渤海王朝の「渤海文化」，10 世紀に入り靺鞨にかわって登場した女真の「女真文化」と彼らが築いた金王朝の文化なども考古学遺物で表現される。しかし，いずれの博物館とも 12 世紀を最後に考古学展示は終了する。そして，歴史展示はロシアの極東支配の展示であって，考古学展示が見せる歴史とは時代的にも内容的にもつながらない。

先住民族の文化展示はいずれの博物館とも考古学，歴史学の展示とは独立している。ウラジオストークでもハバロフスクでも先住民族文化展示は郷土博物館の目玉であるために，最も目立つ場所，つまり建物の中心ともいえるところを占めている。そこには沿海地方とハバロフスク地方の先住民族（ナーナイ，ウリチ，ウデヘ，オロチ，ネギダール，エヴェンキ，エヴェン，ターズ，ニヴフ，アイヌなど）のいわゆる「伝統的」な資料類が所狭しと陳列され，丁寧な解説が付されている。ものによっては製作者名を明記した資料（1980 年代以後に新たに製作された資料の場合）もあり，展示される側の人々と共同で制作された展示もある。しかし，この先住民族文化展示には考古学展示，歴史展示との関係性が見えない。

筆者はロシア側の郷土博物館に対応するものとして，哈爾濱（ハルビン）の博物館も見学した。最近リニューアルされた歴史展示は「中国史」の文脈の中で構成されていることから，先史時代から近現代まで一貫したストーリーで構成されている。つま

り，考古学の成果と歴史学の成果が整合的に接合しており，歴史時代展示となると考古学遺物（発掘資料）と歴史的遺物（伝世品や文書）が並列され，時代も 12 世紀では止まっていない。そこはロシアの極東地域の博物館とは異なる。しかし，黒竜江省の少数民族（満族，赫哲族，鄂温克族，鄂倫春族，朝鮮族など）の展示は浮き上がっている。つまり，考古学展示や歴史展示とのつながりが見えない点ではロシアの博物館と同様の違和感を覚える。

ロシアの考古学者が 13 世紀以後の時代の地層を調査せず，博物館の展示もその直前で終わってしまうのは，一応理由があると思われる。考古学者自身がそのことをきちんと問題として把握していないために，書かれた論文，著作はほとんど見当たらないが，日本とロシアの極東ロシア考古学に従事する研究者との議論から，以下のような理由を仮説として設定することができる。

まず第 1 に地層が浅すぎて後世の撹乱を受けやすく，層位を同定しづらい。第 2 に，この時代になると発掘で見つけやすい土器が作られなくなり，さらに竪穴住居が衰退して平地式住居が主流になるために，遺跡，遺構，遺物を見つけにくい。それはアムール川流域の地域だけでなく，樺太，北海道を含む北東アジア全域で共通に見られる現象である。第 3 にそのような新しい時代の発掘事例が少なく，時代を推定するための参照材料が乏しい。そのために，調査をしていてもその時代の遺跡だと判断できない。そして第 4 にロシア側の考古学者の多くが漢文，満洲語，日本語などで書かれた文書資料や研究書を読めないために，比較的新しい時代の遺跡を調査する意義を理解できず，発掘の意欲がわかない。この 4 つの理由はいずれも大きな壁として極東ロシア考古学の前に立ちはだかっている。しかし，近年はロシアの考古学者でも中国語と漢文を勉強する若手が現れており，4 番目の理由は徐々に解消しつつある。

考古学的な研究に限界があるのならば，歴史学者や人類学者，民族学者との共同調査，共同発掘を実施すればよいのだが，北東アジア，すなわち，極東ロシア，中国東北地方，そして日本列島北部といった地域を主な調査対象とする考古学者，歴史学者，人類学者，民族学者にはそのような発想自体がない。そのような状況はロシアに限らず，中国でも日本でも大差はない。しかもいずれの国でも，未だにないというよりはかつてあったものが失われたという方が正確かもしれない。

日本では 1920 年代に鳥居龍蔵が自ら考古学，歴史学，人類学，民族学を駆使してヌルガン都司[24] の発掘調査や遼代文化の調査研究に従事していた（鳥居 1924; 1936; 1937; 1947）。また，1937 年と 38 年には創立間もない日本民族学会（現在の日本文化人類学会の前身）が考古学者と人類学者，民族学者を動員して千島列島と樺太（サハ

リン）で，それらの地域の文化史を明らかにすべく，考古学発掘と民族調査を含む総合的な学術調査を行った（岡・馬場 1938; 宮本 1958）。ロシアでも 1850 年代にアムール川流域と樺太を調査したシュレンク L. von Schrenck/Л. В. Шренкъ が，考古学，歴史学，人類学，民族学の知識を総動員してアムール川流域の先住民族に関する巨大な総合民族誌を書き上げた（Шренкъ 1883; 1899; 1903）。しかしロシアでも中国でも日本でも，時代とともに各分野の細分化と精緻化が進み，共有できる研究方法と学術用語が減少して，共同研究が成り立たなくなってしまった。

しかし，その結果生じた分野間の断絶は，各地，各国の博物館の展示に現れているように，先史時代から現代までの一貫した地域史，特に地域文化史を描くことを不可能にし，また先住民族文化展示を自己完結化させてしまっている。その結果，19 世紀から今日まで記録されてきた先住民族，少数民族の文化を地域史の文脈の中で位置づけることができない状況に陥っており，さらにその地域の歴史を，北東アジアの文化全体の中で位置づけることができない状況にもある。

6.3　民族誌と民族文化表象の通時的な相対化

このような考古学，歴史学，人類学，民族学の間の断絶，博物館展示に見られる考古学展示，歴史展示，民族文化展示の間の断絶は，人類学，民族学の研究に少なからぬダメージを与えるとともに，展示されている先住民族自身のこれからの文化保存，文化振興にとっても好ましくない影響を与える。

研究対象地域が有する先史時代以来の歴史に深い関心を持たなくなった人類学者や民族学者は，今目の前に展開する状況に関する調査研究に，そのエネルギーを集中させる傾向にある。しかし，歴史に対する関心，特に通時的な比較という視点を失うと，自らが調査している現状を相対化できなくなり，現在という時代性を見過ごすことになる。また，たとえ，通時的比較の視点を残していたとしても，その重要性を認識していないと，時代区分が単純になりすぎて実情にそぐわない歴史表象を生み出すことになる。

民族誌に描かれた民族文化像を，時代を超えて普遍的に見られるもの，あるいは民族文化の本質あるいは中核をなす部分であると解釈するのは，通時的な視点と時代性に対する認識を失っているためである。ソ連時代，北東アジア地域の民族文化研究では，事実上 19 世紀末から 20 世紀初頭に記録されたものをその民族文化の中核的な部分であると解釈することが多かった。ソ連民族学は歴史的な視点を重視したが，教条化した史的唯物論の枠組みに囚われた単純な時代区分しか持つことができなかった。

しかも，民族誌の記述に関してはソ連独特の事情があり，1917 年のロシア革命の以前（до Революции）か以後（после Революции）かという 2 つの時代しか設定されていなかった。それは，ソ連民族学以外の人類学，民族学でも見られた「伝統」と「近代」の二項対立的な時代設定と通ずるところがある。もちろん「革命以前」の状況というのは「伝統」的な状況であり，前近代的な状況である。そして「革命以後」というのが「近代」に相当する。ソ連以外の地域ではこの「伝統」と「近代」の境目は多様だが，ソ連ではそれがロシア革命（あるいは社会主義体制の確立）におかれたのである（注 3，注 4 で言及したソ連時代に執筆された民族誌はその代表的な事例である。中国で出されている赫哲族に関する概説書も基本的にこの枠組みに準拠しているが，境目は 1949 年の「解放」時である。）。

この二項対立的な時代区分は，一見通時的な視点によるもののように見えるが，実はそうではない。というのは，実際に民族誌やモノグラフで行われているのは，研究者，調査者が現に見ている事物や事象を「伝統」的なものと「近代」化されたものとに分類することであり，両者ともに調査時点で同時存在していることがほとんどだからである。つまり伝統と近代，あるいは革命以前，革命以後というのは時代を区分しているのではなく，現在を区分しているのである。

通時的な視点から，しかもその時間深度を深く取り，時代ごとの政治経済状況や学術分野の潮流に着目しつつ，各時代の民族誌的記述を比較すれば，19 世紀末から 20 世紀にかけて次々と世に出された民族誌も時代の産物であり，その内容も記述方法もその時代の状況に拘束されていることが見えてくる。すなわち，民族誌に書かれているのは調査された時代の特異な事例であり，また調査した者の目に映ったものがその当時の分析方法に則って整理，記述されたものである。だからこそ民族誌の歴史の文脈における相対化が必要なのである。例えば，アムール川流域のロシア側のナーナイの場合，19 世紀末から 20 世紀半ばにかけて L・Ya・シュテルンベルク，I・A・ロパーチンやA・N・リプスキー（A. H. Липский），V・K・アルセーニエフ（B. K. Арсеньев），Yu・A・セム，A・V・スモリャークなどの民族学者が盛んに調査を行い，いまや「古典的」ともいえる民族誌を数多く残した。現在でもロシアだけでなく，欧米，日本人類学者，民族学者も彼らの著作を，ナーナイ文化の基礎的な記述として活用する。

しかし，彼らの調査は，ナーナイの居住地がロシア領となって半世紀近い月日が流れ，さらにロシア革命がおこり，革命政権が安定して社会主義政策が浸透してくるというような時代に行われたものである。すでに中国との関係を切られ，その華やかな

文化を支えた絹織物や貴金属，宝石類，あるいはその社会的地位を証明する文書類などの供給が途絶えがちになり，また移民の増加によって旧来の漁場や猟場が急速に失われていた。彼らの眼前にあったのは，生業狩猟と漁撈に依存する一見「原始」,「未開」にしか見えないナーナイたちの疲弊した姿だったのである。その上，調査を行った民族学者たちはその多くがマルクス主義人類学の方法論を身につけており，彼らは狩猟，漁撈，採集といった基礎的な生産活動と，それに付随してみられる物質文化，生産形態に規定されるとされる社会構造，そしてシャマニズムや精霊信仰のような一見「原始的」に見える信仰形態にしか関心をもたなかった。しかも，ソ連はアムール川流域の領有の正当性を主張するために，中国の歴代王朝はアムール川流域を実効支配できていなかったという歴史解釈を普及させた（Tikhvinskii 1985）。この解釈では，ナーナイたちは国家支配を知らない「原始民族」,「未開民族」の方が都合が良かった。

しかし，時間深度をわずか 17 世紀初頭までの 300 年間さかのぼらせるだけで，ソ連民族学が築いてきたナーナイの文化表象が，全体の中のごく一部にすぎないことを示すことができる。それは，既に本稿の 3 と 4 とで明らかにした通りである。また，1850 年代に調査したシュレンクの民族誌が，ロシアだけでなく中国や日本に残されている史料を使って住民の歴史的な経緯を丹念に追い，また交易活動について一つの章を割いて詳述するなど，それ以後のものと比べて特異なのも，その時代にはまだアムール川流域の住民が中国や日本と盛んに交易，交流を行っており，シュレンクがマルクス主義人類学とは異なる方法論をもち，帝政ロシアも清のアムール川の領有を認めている，という状況にあったからである。

民族誌を記述する調査者，それを分析する研究者，そしてその成果を受容する読者に，この民族誌の通時的な相対化の重要性が認識されない場合，時として調査時点や民族誌執筆時点での状況が「伝統的」として固定化，絶対化され，その民族誌に権威が生じる。その権威が研究者の間だけで収まっていればよいが，著書や論文あるいは展示の形で世に流布することで，その権威が普及し，それが調査された人々にも伝わって，彼ら自身の文化に対する考え方に大きな影響を与える。場合によっては考え方を無意識のうちに拘束することすらある。つまり，民族誌に書かれている内容が自分たちの文化の真の姿であると，当の民族出身者が理解して，それに倣おうと努力すらするようになる。それは極東ロシア地域では典型的な形で見られ，日本のアイヌ研究でも生じており，中国東北地方でも見られるようになってきている。これらの地域の博物館における民族文化展示にもそれは端的に現れている。ポストモダン人類学ではそのような状況が民族誌の持つ権威，権力の問題としてしばしば批判の対象とされ

た（Clifford and Marcus eds. 1986; 杉島 1995; 太田 2001）。

しかし，この問題は博物館展示よりさらに深刻な状況を引き起こしている。例えば，国家の対少数民族・先住民族行政と国民一般の彼らに対するイメージに直接，間接の影響を及ぼしている。現在でも日本を含め，先住民族，少数民族と呼ばれる人々を抱える国々で問題となっている彼らに対する社会的差別とその相対的な貧困状態も，権威を帯びた民族誌が創り出してきたイメージが関わっている。すなわち，そこに見られる彼らに関する未開社会，原始社会，伝統文化，自然民族などという言説が，多数派民族出身の国民に，後進的で援助を必要とする人々，現代文明の中では生きていけず社会の負担になる人々というイメージを植え付けたことは否定できない[25)]。

そして，そのよう言説はさらに当の先住民族や少数民族自身の意識にも定着し，それに対する反発と自虐をもたらす。しかしその一方で，一部は冷静に受け止められ，自己認識と自己主張に取り入れられる。例えば，現代のナーナイの村の博物館の展示はまさにソ連民族学が構築したナーナイ文化の本質主義的な展示である。そして，その館員たちの解説はソ連民族学が世に出した民族誌からの引用である。それはナーナイだけでなく，中国側の博物館の赫哲族の展示でも，日本のアイヌに関する展示でも同様である。しかし，近年は更に一歩進んで，かつて人類学者や民族学者が広めたマイナスのイメージを呼び起こす言説の中からいくつかを選んで，それをプラスに転化して自己宣伝に使う動きも見られる。例えば，自然民族や自然とともに生きる文化といった言い回しは，自然環境保護が叫ばれている昨今では，逆にプラスのイメージを呼び起こしている。そして人類学者や民族学者が中核的な部分と位置づけた「伝統文化」も，自然と調和した文化，あるいは美的に優れた文化として再評価して，逆にそれを強調しようとする動きすら見られる。その典型的なケースが魚皮文化である。かつて赫哲族，ナーナイは魚皮を衣類に仕立てて身につけていたことから，中国側から「魚皮韃子」，「魚皮国」と呼ばれて蔑視された（楊 1985: 253）。しかし，現在では「魚皮画」という工芸作品を仕立て，それに高い芸術性を付加することで，かつては未開性の象徴だった魚皮を現代社会における自己表現の媒体に昇華させようとしている。また，イマカンも同様で，かつての文字のない未開社会の口頭伝承あるいは芸能としてしか見られなかったものが，国家的な「非物质文化遗产」（日本でいう無形文化遺産）に認定されるまでになった（イマカンについては孟（1998），黄（2006）などを参照）。

しかし，それでも彼らを包含する社会には未だに差別と貧困，そしてマイナスのイメージが根強く残っている。その根本的な原因の一つが，人類学者や民族学者が作り

上げた伝統文化，伝統社会のイメージであり，さらにそれを相対化せずに，中核化，本質化してしまったことである。

6.4　言語，国境を越える研究協力

敖其村をはじめとする中国の博物館の少数民族文化展示をロシアの先住民族展示，そして日本のアイヌ文化展示などと比較して，共通の欠陥として目につくのは，中国，ロシア，日本という国家の枠組みと中国語，ロシア語，日本語という言語の枠組みを乗り越えた情報交換，情報共有がなされていない点である。中国側ではロシアのナーナイに関する情報が若干ではあるが示されている。展示にロシアの民族誌から引用された情報が使われたり，ソ連崩壊後に開始された赫哲族とナーナイとの交流の様子が紹介されたりなどの事例も見られる。しかし，管見の限りロシア側には中国の赫哲族を紹介する展示はない。

敖其村の博物館の展示では，ロシア側の情報がほとんど含まれていなかった。赫哲族の分布も中国国内の部分しか描かれていない。また，「4　もう一つのゲイケル・ハラ」でも触れたように，この村の主要な住民であるゲイケル・ハラ（葛氏）の人々はロシア側に去ったといわれる人々の子孫たちがどのようになっているのかについての情報を全く持っていなかった。筆者たちが，ロシア側のニージニエ・ハルビ村やコムソモリスク・ナ・アムーレ市に住むゲイケル・ハラ出身の人々の動静を伝えることで，敖其村の人々は伝承が本当だったことを知ったという具合である。

考古学，歴史学，人類学，民族学の間の研究協力や共同研究が進まない理由の一つに，国家と言語の障壁がある。例えば，極東ロシアに関する考古学的な調査と民族学的な調査ではロシア側に膨大な蓄積がある。しかし，ロシアではその両者を時代的にも研究方法論的にも仲介をするはずの歴史学の分野での研究がなかなか進まない。逆に中国では考古学的な研究も民族学的な研究もロシアの後塵を拝する形にならざるを得ないが，歴史学については膨大な史料を有している。ただ，その研究は緒に就いたばかりではある。そして，日本にも極東ロシア，中国東北地方，そして日本列島北部の考古学に従事する研究者と，同地域に関する歴史文献を扱う研究者の層は厚いが，人類学，民族学関係の研究者は少ない。つまり，ロシア，中国，日本の関係する研究者が協力し合えば，あるいは情報を交換するだけでも，それぞれの弱点を補い合って，より完成度の高い北東アジア地域史を復元し，民族文化をその文脈に位置づけた形で表象することができる。それを展示にいかせば，より完成度の高い地域展示が可能になるだろう[26)]。

それを阻んでいるのが政治と言語の壁である。政治の壁の方が高そうに見えるが，意外と言語の壁もその克服は難しい。言語の壁には 2 種類あり，史料を読み解く，あるいは調査で地元の住民とコミュニケーションをとるための言語（情報を入手するための言語）と，調査研究成果を論文や著書，展示という形で公開するための言語（情報を発信するための言語）それぞれに壁がある。情報を入手するための言語については，史料を読み解くにせよ，インフォーマントとコミュニケーションを取るにせよ，習得に膨大な時間と労力を要する。しかしそれを乗り越えて，新しい言語による情報を手に入れられるようになれば，全く違う世界が広がる。すなわち，従来慣れ親しんできた言語による情報だけで構築されていた世界が，別の言語によって得られる情報と交わることによって，異なる像を結ぶわけである。例えば，ロシア語だけ，あるいは現代中国語だけの情報で構築されてきたナーナイ，あるいは赫哲族の民族像が，そこに中国語やロシア語，さらには漢文，満洲語，日本語，英語，ドイツ語などナーナイ，赫哲族に関する記録を残した様々な言語の史料から得られる情報を付け加え，交わらせていくことで従来とは全く異なる像が形成されていく。言語によって視点や視野，注目される点，扱う分野，分析方法などがそれぞれ異なる。政治的な主張だけなく，純粋に学術的な面でも相違点は大きい。複数の言語で書かれた資料や，多様な言語で語られた言説を比較し，相互に補完し合うことは，複雑に絡み合う歴史的事実をより詳細に明らかにするためには不可欠である。本稿ではそのごく一端を 3 と 4 で，赫哲族とナーナイのゲイケル・ハラを事例にして示した。

この極東ロシア，中国東北地方，そして日本列島北部からなる北東アジアという世界はその意味で非常に興味深い地域であるとともに，取り組むのが難しい世界でもある。というのは，ここには中国，モンゴル，女真・満洲，韓国・朝鮮，日本，ロシアという国家，そして満洲＝ツングース系諸民族，モンゴル系諸民族，古アジア系諸民族，アイヌ民族，漢民族，韓国・朝鮮，日本，ロシア，ウクライナ，古儀式派教徒[27]など多種多様な民族や人々が接触し，進出し，時には利害を争った歴史があり，この地域に関する情報が様々な言語で残されているからである。それらすべてにアクセスしなければこの地域の本当の意味での歴史と文化の理解と再構築は不可能である。

現時点ではそれを完璧に成し遂げた研究者，組織は存在しない。それどころか，いずれの国も政治的経済的な理由により，故意に特定の言語で残された情報を取り上げない，あるいはアクセスを拒否するということを行い，意図的に自国に都合の良い歴史像あるいは文化像を構築してきた歴史を有している。

情報発信のための言語の壁は，入手のための言語よりも種類が減るために低くはな

る。しかし，その重要性は同じである。新しい種類の史料やデータの入手によっていかに学術的に有意義な発見をしても，それを広く発信して，より多くの人々と共有しなければ，その意義は低下する。出身社会の言語でのみ発信しても，類似の発想をする人々の間で再消費されるだけで，そこから新しい発想や視点を得ることは難しい。異なる発想をする世界に発信して，予想もできないような反応を得ることによって，さらに新しい意義のある研究へと深化できる。

20 世紀末以来の情報技術の急速な発展と，経済のグローバル化の進展により，それまでよりも格段に国境と言語の壁は低下している。そして，研究対象とされてきた北東アジアでも先住民族や少数民族も含めて多くの人々に多様な情報が行き渡るようになり，これまで理解が難しくアクセスする機会もなかった，異なる言語で作られた情報に対する需要も生まれつつある。すなわち，異なる国の研究者がもたらす新しい情報に強い関心を寄せるようになっている。本稿では国家の情報統制の是非を云々するつもりはないが，他の言語で作成された史料や資料，情報を，言語的に理解できないことを理由に排除するのは，研究者としては問題外の行為であろうと思われる。

6.5　敖其村の博物館の評価

以上の議論を踏まえて，本稿で考察の端緒に据えた敖其村の博物館の展示は結局どのように評価できるのだろうか。結論から言えば，まだ初歩的な段階ではあるが，地域の文化史を，先住民族文化を織り込みつつ，先史時代から現代まで一貫して語るための切り口を示していたと思われる。ことに筆者が注目するのが，この村の赫哲族の主要な一族であるゲイケル・ハラの歴史を柱にして歴史展示を組み立てた点である。17 世紀初頭から史料に登場する一族の歴史を柱に据えて，赫哲族の歴史と地域史を語ることで，赫哲族という少数民族の文化が地域文化史の中で相対化され，その文化の中で地域史が相対化される端緒となりうるからである。

しかし，現時点の展示ではまだそれは不徹底である。というのは，歴史展示と文化展示との間が遊離しているからである。すなわち，ゲイケル・ハラの歴史上の活躍を物語るパネルと，白樺樹皮細工や魚皮の衣装，狩猟具や漁具，シャマンが使う祭具や占い用具などの資料の展示との間にまだ大きな違和感が横たわる。後者が相変わらず「非文明的」で「自然の中で生きる」文化という理念の影響を強く残したままだからである。

理想的にはゲイケル・ハラの一族が残した遺品類や彼らの三姓副都統衙門における地位を示す文書類（実物がなければ写真でもよい）などによって歴史展示の部分を補

強し，それと同時に，この一族の者たちが正黄旗のニルに所属していた時代（清代中期から後期）に使用した武具，衣服，住居などを示す資料や，祖先祭祀と信仰に関連する資料などを展示すれば，歴史と文化の関係が近くなる。さらに，2 階にあった毛皮交易関連の展示（毛皮標本と狩猟用具）と漁業関連（魚の標本と船模型）の展示をゲイケル・ハラ一族の展示と関連するように展示すれば，この一族の繁栄の経済的な基盤もわかるようになる。ゲイケル・ハラ一族は，当初は漁業に食料基盤をもちながら（ニルの一員となってからは旗地を支給されていることから，農業にも従事しているはずである），クロテンを柱とした毛皮交易を通じて清朝と密接な関係を持ち，その軍事的，行政的組織基盤である八旗組織に参入して地域の有力者にのし上がっていった人々である。彼らが持っていた文化も，一族の成長と衰退とともに変化していったわけで，それを文化展示の中に取り入れることができれば，従来の人類学や民族学が主張する「未開文化」あるいは「自然と一体化した文化」としての赫哲族の文化ではない，歴史の中で相対化された新しい文化像を展示の中で表現することが可能になるだろう。

そして，それによって初めて，本質主義的な部分と現代的な部分とを融合させた文化展示，すなわち，狩猟，漁業といった伝統的な生産活動や，魚皮，白樺樹皮などの素材で製作された衣服や生活用具などの伝統的な物質文化と，その伝統から生まれた工芸作品や現代アートを同時に見せる展示が生きてくる。それらは，赫哲族の人々が先史時代から変わらず持ち続けた文化の名残というのではなく，長い歴史を積み上げながら熟成させてきた文化の上に，現代工芸やアートを生み出しているのだということを，より鮮明に見る者に理解させることができるようになるだろう。

さらに，中国の事情を考慮すれば，ゲイケル・ハラを初めとする赫哲族の人々が，古い時代から中国および，日本，アイヌ，ロシアを含む北東アジアの様々な人々と歴史を共有してきたということを示すことによって，村を訪れる観光客に対して，自分たちの文化，作品をもっと身近なものとしてアピールすることも可能になる。また，それによって工芸品の売り上げ増や観光収入の増加につなげることも可能だろう。

7　結論

本稿では，敖其村という中国東北地方の人類学，民族学ではあまり知られていない村にある博物館で見つけたゲイケル・ハラという，これまたほとんど研究者には知られていない一族の来歴に関する展示から，博物館での民族文化の展示方法から先住民

族文化の研究方法まで議論を進めてみた。このような問題に取り組むようになったのは，「1　はじめに」でも指摘したように，ナーナイあるいは赫哲族という民族について，歴史学研究から得られるイメージと民族学研究から得られるイメージとの間で感じられるいいようのない違和感がどうしても気になったからである。同様の違和感は，ロシアと中国での調査で出会った村人たちの話，物腰，そして私的に保有している見事な絹織物の数々と，地方都市や村にある博物館の展示との間でも感じられた。

その正体は，歴史に疎い人類学者や民族学者たちの思い込みが創り出した文化表象と，史料に名前と事績を残した人々の実際の行動との間のずれであり，それはまた，フィールドワークで文化を集団の属性として捉える人類学や民族学と，史料の上で個人レベルの行動を一つ一つ押さえていく歴史学の方法論上の相違でもあった。すなわち，同一の社会集団に属し，同じような文化を持っているはずの人々について，個人レベルの行動を積み上げていって見えてくる集団の文化像と，初めから集団レベルで一括して語られる文化像との間に違いが生じるのである。

史料に登場する個人は同一集団の中でも階層的に高い方に属し，民族誌で集団的に扱われる人々の階層が概ね低いという可能性もあるかもしれない。しかし，本稿で扱ったゲイケル・ハラに代表されるナーナイのハラという集団は，親族関係が明確かどうかは不問ではあるが，例えばゲイケルと名乗れば相互に同族と認識しあう間柄にある人々の集まりである。したがって，ある集団の文化を包括的に語ることを目的とする民族誌において，階層が高く，洗練された文化を持つからといって（しかも特に中国文化の影響下にあると評価されることによって）その部分を捨象するというのは，研究姿勢としては問題である。また逆もしかりで，低階層，低所得の人々の実態を無視して文化を語るのも問題である。ロシア語や中国語で書かれた，あるいは英語や日本語などに翻訳されて普及している従来のナーナイや赫哲族の民族誌はその点でどちらにせよ欠陥を有していたといえる。筆者の研究はそのような民族誌の中に，史料を使った歴史研究で得られた個人の事績から得られる異なった文化像を付加し，多面的な民族文化像を構築することを目的としてきた。

1990 年から始めたアムール川流域での調査では，史料で示唆されていた事実を，フィールドで確認することもあり，従来の民族誌に付加すべき事実を少しずつ蓄積してきたが，2012 年の黒竜江省での調査，特に最後の敖其村での調査では，ゲイケル・ハラの歴史について長年探し求めてきたミッシングリンクの一部を発見することができた。本稿は筆者のライフワークとしてきた史料を使った歴史研究とフィールドでの民族学調査の融合による，より包括的なアムール先住民族文化の文化表象の見直しと

いう研究の一環である。

その結論として強調しておきたいのは，人類学や民族学も時間軸を念頭にいれ，民族誌のみならず自らの調査についてもその時代性（現代という時代に拘束された特性）を常に意識しながら，データを分析しなければならないという点である。民族誌も史料の一種なのである。したがって，実証性を担保するためには歴史学で行われる史料批判と同様に民族誌批判という過程が必要である。すなわち，特定の時代の調査によって作成された民族誌に描かれる文化像を，その民族あるいは集団が置かれてきた地域史の中で相対化し，さらにその文化像を拘束する時代性を，別の史料を使って明らかにしつつ，その時代の文化と同時代の自然環境や人間が創り出す政治経済社会状況との相互作用の連鎖から，特定の集団ないしは民族の文化を動態的かつ包括的に理解する。人類学や民族学における通時的研究，すなわち文化史研究とはこのような形で再定義できるのかもしれない。そして，民族学博物館における民族文化の展示にもその動態的，包括的理解が反映されるように，展示されている実物資料や映像にどのような歴史的背景があるのか，それを今展示して観覧者に紹介することにどのような意義があるのかということを，解説文章や演示方法の工夫によって明示する必要があるのだろう。

ナーナイ，赫哲族の文化のうち，ゲイケル・ハラに関しては，文書記録と口頭伝承，そして敖其村の博物館の展示から，どのような人々で構成され，それぞれどのような文化を持っていたのかということはかなり明らかにすることができた。清代の途中で 2 つのグループに分裂し，松花江流域の残ったものは三姓を拠点にして三姓副都統衙門と正黄旗という八旗組織の中で活動し，中から佐領，協領，副都統といった高官に登るものを輩出した。彼らは漢字や満洲文字を使い，漢語や満洲語を理解し，清朝の東北政策で重要な役割を果たすことになる。しかし，清朝滅亡後は三姓を離れて敖其の地に安住の地を求めた。彼らの中からは対ロシア戦や抗日戦のリーダーとなるものも現れた。

他方，別れてアムール川を下流に下ったものたちはアニュイ川で毛皮貢納民として暮らしたが，そのうちそこから更に下流に拡散し，ついにナーナイの最も下流の居住地であるアジ村近辺に定着した。彼らはウリチと接する下流地域のナーナイとしての言語と文化を身につけるとともに，近辺のランドマークとなるような巨岩に自分たちの説話を結びつけた。ただし，彼らには中国側の満洲の貴族たちと同等以上であるという意識も残されていたようで，要望に応えて満洲貴族出身の花嫁を受け入れていたという記憶も残している（Сасаки 2008: 70）。

筆者が目指すナーナイ，赫哲族の文化の通時的，包括的理解を目指すためには，ナーナイ，赫哲族の他のハラの人々についても同様の来歴研究をすべきだろう。ただしあらゆるハラが，ゲイケル・ハラのように刊行された史料に登場するわけではないので，新しい情報を探して未刊行の原史料（檔案やアーカイブなど）を丹念に調べる必要がある。それはナーナイ，赫哲文化を多面的に，そして動態的に理解するために避けて通れない作業である。そしてそのような理解は，他の民族集団，例えばナーナイの隣のウリチ，ウデヘ，ニヴフ，さらには樺太のウイルタ，そして樺太から北海道にかけていたアイヌなどの文化に関しても必須である。ことに膨大な量の考古学的発掘の事例と遺跡，遺物に関する資料が蓄積され，多様な言語で書かれた多種類の史料があり，分厚い民族誌的記述が残されているアイヌ文化に関しては，アイヌと研究者の双方の共同研究によって十分実現可能な段階に入っていると思われる。

注

1）　本稿は，日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 A（海外学術調査）「ロシア極東森林地域における文化の環境適応」代表者：佐々木史郎，2009 年度～ 2012 年度）の研究成果の一部であるとともに，国立民族学博物館機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」（代表者：韓敏　2012 年度～ 2014 年度）の成果の一部でもある。本稿は後者によって実施された第 2 回国際シンポジウム「中日人类学・民族学的理论刷新与田野调查」（2013 年 11 月 18 日～ 19 日，北京，中国社会科学院民族学・人類学研究所）で行った報告を元にしている。

2）　本稿では中国側の「赫哲族」については「～族」と付けるが，これは中国側の公式の民族名称だからである。ロシア側のナーナイその他の民族の名称には付けないが，それは，差別的，侮蔑的ニュアンスが生じるからである。また，中国側の民族名については漢字表記とする。それが中国での公式の表記だからである。「赫哲族」は仮名で「ホジェン族」，「ヘジェン族」，「ヘジェ族」などとも表記されることがあるが，いずれも中国語としても，赫哲語としても発音を正確に反映しない表記であるために，ここではそのような表記は採用しない。「赫哲」は拼音で記せば hèzhé だが，赫哲族の自称は発音記号で表記すると hədʒə となる。ナーナイはロシア語での正式の表記は нанайцы となる。しかし，それでは日本語しか解さない読者には全く読めない。それに対して「ナーナイ」というカタカナ表記はナーナイ語で自称を発音するときの音（nɑːnai あるいは нанай，本文 9 ページの説明も参照）に近いため，本稿ではとりあえずこの表記を採用している。

3）　ナーナイ，赫哲族の民族誌として基本的な文献としては以下の著者の著作を上げることができる。すなわち，Шренкъ（1883; 1899; 1903），Шимкевичъ（1896），Laufer（1902），Штернберг（1933 (1991)），Лопатинъ（1922），Lattimore（1933），凌純聲（1934），赤松智城・泉靖一（1938），Сем（1973），《赫哲族简史》编写组（1984）などである。これらは扱った主要なテーマにもよるが，Шренкъ（1883）と歴史研究が盛んな中国で編纂された凌純聲（1934），《赫哲族简史》编写组（1984）以外は概して歴史の記述が薄い。新しい時代になって Березницкий и др.（2003），黄泽・刘金明編（2004），黄任运（2006），刘敏（2007），黒龙江省编辑组編（2009）などが出され，未開社会としての赫哲族やナーナイを描くという姿勢は弱まった。刘敏（2007）は赫哲族の清代から民国時代の状況についてかなり詳しい研究を残している。しかし，これらも歴史を記述しながらも，民族誌の記述や現時点で見られる状況を通時的に相対化するという試みは行われていない。

歴史学からの研究では松浦茂の清朝のアムール支配に関する一連の論文があるが，それは 2006 年に京大出版会から 1 冊の本にまとめられて出版され（松浦 2006），まとめて読めるよ

うになった。人類学的な見地からすると問題は少なくないが（佐々木 2008），赫哲族，ナーナイの歴史，あるいは 17 世紀から 19 世紀にかけての時代にアムール流域や樺太で起きた歴史的な出来事，さらにはこの地域を支配した清という王朝の性格を知るには唯一で最良の本である。

4）　その典型的な事例が 1954 年にレーヴィン М. Г. Левин とポターポフ Л. А. Потапов が編集し，ソ連科学アカデミー民族学研究所が刊行した『シベリア諸民族』Народы Сибири である。そこにはシベリア文化と社会が当時承認されていた民族ごとに紹介されているが，最後に必ず「現代の状況」，あるいは「社会主義時代の○○」（○○には民族名が入る）という項目があり，社会主義政策によっていかに「原始的」な民族が社会主義社会へと発展したのかが述べられている（Левин и Потапов 1954）。

5）　筆者は以下のような研究プロジェクトが提供した調査機会を利用してアムール川流域で先住民族の歴史と歴史意識に関する調査を行ってきた。プロジェクト名，プロジェクトの期間，筆者の役割，調査期間を示す。文部省科学研究費補助金海外学術調査「中国内蒙古エヴェンキ族の言語文化の実地研究」（1988 年度～ 1990 年度，研究分担者，調査実施期間：1990 年 1 月 5 日～ 3 月 1 日，1990 年 7 月 15 日～ 8 月 11 日）。文部省科学研究費補助金国際共同研究「ロシア極東少数民族の自然集落に関する国際共同研究」（1997 年度～ 1999 年度，研究分担者，調査実施期間：1997 年 9 月 15 日～ 29 日，1998 年 7 月 31 日～ 8 月 17 日）。日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 B（海外学術調査）「ロシア極東地方における自然環境と伝統的生業についての民族考古学的研究」（2001 年度～ 2003 年度，研究分担者，調査実施期間：2001 年 8 月 8 日～ 26 日，2002 年 7 月 20 日～ 8 月 22 日）。文部科学省科学研究費補助金特定領域『資源人類学』計画研究班 07「生態資源の選択利用とその象徴化の過程」（2003 年度～ 2007 年度，研究分担者，調査実施期間：2005 年 8 月 11 日～ 9 月 1 日）。日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 A（海外学術調査）「ロシア極東森林地域における文化の環境適応」（2009 年度～ 2012 年度，研究代表者，実施期間：2009 年 8 月 17 日～ 31 日，2009 年 10 月 2 日～ 12 日，2010 年 7 月 26 日～ 8 月 9 日，2011 年 8 月 12 日～ 9 月 4 日，2012 年 9 月 2 日～ 10 日，2012 年 11 月 29 日～ 12 月 9 日）。本稿は，これらのプロジェクトによる調査研究の蓄積の上に書かれている。各調査にはそれぞれ学術的な意義があったが，最新の 2012 年に中国で実施した調査は，日中ロ共同調査であったとともに，ロシア側のナーナイ出身の民族学者と中国側の赫哲族出身の研究者と学生が参加していたことに大きな意義があった。

　数々のアムール調査の機会を提供してくれたプロジェクトの代表者の方々（すでに故人となられた方もおられるが）と，筆者を暖かく迎え入れ，調査に協力してくれた調査地の村の方々，ことに集中的な調査に協力していただけたコンドン，ウリカ・ナツィオナリノエ，ニージニエ・ハルビ，ナイヒン，ダイェルガ，街津口，抓吉，海青，饒河，四排，敖其の各町村の方々には篤く御礼申し上げたい。

6）　近年の中国，ロシアの国勢調査では，中国側の赫哲族が 4,500 人ほど，ロシア側のナーナイが 12,000 人程度となっている。もとよりこれは自己申告であり，赫哲語，ナーナイ語を母語にする人はおろか，それを若干でも解する人の割合も低い。

7）　ロシア側のナーナイから見れば，中国側の赫哲族は「上流」にいるので，下流にいる人を意味する「赫哲」という名称には違和感を覚えるという。ロシア側のナーナイ語では上流の松花江，ウスリー川，クル・ウルミ川流域にいるものは「アカニ」（キリル文字表記では акани（Оненко 1980: 31））となる。

8）　赫哲族とナーナイとの間には言語的な相違点が指摘されることがある。赫哲族の言語である赫哲語には赫真方言と奇勒恩方言とがあり（安俊 1986: 1），前者はロシア側のアムール方言（特に上流方面の方言）との同一性が指摘されているが，後者はかなり異なる言語であるという。ツングース系言語の専門家である風間伸次郎によれば，この奇勒恩方言はロシア側のナーナイの中でもクル川，ウルミ川流域にいる人々の方言に近いという（風間 1996: 134–135; 風間 1997: 114）。この地域の人々はシュレンクによってキリという独自の民族集団とされていた人々で（Шренкъ 1883: 34–35），パトカノフら後の研究者によってナーナイの一方言グループと区分し直された人々である（Патканов 1906: 30）。彼らは松花江流域と交流があり，ユコムザル（またはユカミンカ，中国では尤），ウディンカ（中国では呉）など両者に共通のハラ（ナーナイの氏族）もいて，クル・ウルミ方言と奇勒恩方言の間の近縁関係には蓋然性が高い。しかし，両者の交流は 20 世紀に入ると難しくなったようで，ユコムザルの人々もウディンカの人々も，中国側，ロシア側共に相互に同じハラ名を持つ人がいるとい

う事実は知られていない。

9）18 世紀には剃髪黒金，不剃髪黒金（楊 1985: 251），そして 19 世紀後半には短毛子，長毛子といった名称と分類がなされた（曹 1985: 2283–2285）。「剃髪」対「不剃髪」，「短毛」対「長毛」というのは，額から頭頂部にかけて剃りを入れるか入れないかの違いである。すなわち，剃髪，あるいは短毛といわれた人々は頭頂部を残して剃り上げ，残した部分の髪を長く伸ばして三つ編みにした。そのような髪型は満洲からモンゴルにかけて普及していた。不剃髪あるいは長毛というのは，髪は三つ編みにしているが，頭のどこにも剃りを入れない髪型である。注 11）も参照。

10）例えば 1714 年（康熙 53 年）に当時の赫哲の人々から八旗編成が行われ（吉林通志 1900（1986）: 1032–1033; 清実録六（聖祖実録 3）1985: 548），1732 年（雍正 10 年）閏 5 月には赫哲の他，八姓と呼ばれた人々からも編成が行われた（吉林通志 1900 (1986): 1032–1033; 清実録八（世宗実録 2）1985: 579; 松浦 2006: 319–324）。しかし，八旗に編入された人々の居住範囲はアムール川とウスリー川が合流する地点よりそれほど下流には下らないところより上流にいた人々で，おそらく現在のアニュイ川よりも下流にいた人々は対象にされたことはなかった。

11）アムール川下流域における 19 世紀初頭の時点で剃りを入れる髪型の分布は，シュレンクが見定めたゴリド（ナーナイ）の下限だったアジや満洲仮府が置かれたデレンを超えて下流まで広がっており，ウルゲー（シュレンクの時代にはイリ Ыри と呼ばれていた。現在のマキシム・ゴーリキー村近辺）という村あたりまで到達していた（間宮 1810（1985）: 131）。それより下流になると剃りを入れる人々はいなくなっていた。剃りを入れない人々（それが事実上現在のウリチとニヴフの祖先になるが）は清朝の支配をそのままでは受け入れず，毛皮の貢納と恩賞の受け取りも商活動の一環として捉えていた。詳しくは佐々木（1998: 753）参照。

12）同じことを『清実録』（太宗文皇帝実録）では，「戊子，東方格伊克里部落，四頭目卒四十人来朝，賜宴竝賜衣各一襲」（戊子の日に東方の格伊克里部落の 4 人の頭目が 40 人の部下を率いて朝貢に訪れたので，招宴を催し，各人に衣装を 1 着ずつ下賜した，下線は筆者）と述べている（清実録二 1985: 56）。

13）以下，太宗の治世の天聡，崇徳年間（1627 年～ 1643 年）におけるゲイケル・ハラの来朝について，『清実録』（太宗実録）には以下のように記されている（下線は筆者）。

1635 年（天聡 9 年）正月：「使犬部落索瑣科来朝，貢黒狐黄狐貂鼠水獺等皮及狐裘貂裘」（清実録二 1985: 287）（使犬部落索瑣科が来朝し，ギンギツネ，キツネ，クロテン，カワウソなどの毛皮とキツネ皮の皮衣とクロテンの皮衣を貢納した）。

1637 年（崇徳 2 年）2 月：「虎爾哈部落，託科羅氏，克益克勒氏，縟野勒氏頭目率六十人，至盛京，貢貂狐皮等物」（清実録二 1985: 438）（フルハ部落のトホロ，ゲイケル，ルヤラの各氏族の頭目が 60 人を率いて盛京にやってきて，クロテン，キツネの毛皮等を貢納した）。

1638 年（崇徳 3 年）11 月：「虎爾哈部落，克宜克勒氏，達爾漢等十三人，虎習哈禮氏，納木達禮十人，賴達庫四人来朝，貢元狐黄狐貂鼠青鼠海豹皮等物」（清実録二 1985: 587）（フルハ部落のゲイケル氏族の達爾漢ら 13 人，フシハラ氏の納木達禮ら 10 人，賴達庫ら 4 人が来朝して，ギンギツネ，キツネ，クロテン，青鼠，アザラシなど毛皮などを貢納した）。

1640 年（崇徳 5 年）正月：「賜貢貂東方克宜克勒氏布珠，錫希尼吹納，及布珠妻，精達禮妻，布克騰妻，與同来五十三人，蟒衣，帽，韡鞮帶，布疋器用等物，有差」（清実録二 1985: 668）（クロテンの毛皮を貢納した東方のゲイケル氏族の布珠，錫希尼吹納，及布珠の妻，精達禮の妻，布克騰の妻，そして同行の 53 人に，竜紋の衣装，帽子，革帯，布，他の器物などの恩賞を地位に応じた差を付けて下賜した）。

1641 年（崇徳 6 年）12 月：「東方巴牙喇，脱科洛，努牙喇，黒葉，馬爾遮賴，科爾佛科爾，克宜克勒，庫薩喀里，八姓頭目，遣董糾等来貢貂皮賜宴賞衣，帽，緞，布等物，有差」（清実録二 1985: 793）（東方のバヤラ，トホロ，ルヤラ，ヘイ，メルジェレ，ホルフォコル，ゲイケル，フシハリの 8 つの氏族の首長が，董糾らを派遣してクロテンの毛皮を貢納した。その恩賞として，宴を催し，衣装，帽子，緞子，綿布などを地位に応じた差を付けて下賜した）。

1643 年（崇徳 8 年）2 月：「賜貢貂皮虎爾哈部落精徳里額駙等十三人，衣服，帽，韡等物，有差」（清実録二 1985: 883）（クロテンの毛皮を貢納したフルハ部落首長精徳里ら 13 人に，衣服，帽子，革帯などを，地位に応じた差を付けて下賜した）。

下線を引いて強調した「格伊克里」，「克益克勒」，「克宜克勒」はいずれもゲイケルの当て字と思われる。1635 年正月の記事と 1643 年 2 月の記事にはゲイケルに相当する名称が登場

しないが，前者の場合には索瑣科という人物がゲイケル・ハラのソソコであると思われ，また，後者の場合には精徳里という人物が 1640 年（崇徳 5 年）の記事に登場する精達禮と同一人物と考えられることから，ゲイケル・ハラの来朝と考えた。

14）『満文老檔』に出てくる「使犬国」Yendahūn Takurara gurun と同じ種類の名称で，犬ぞりを主要な交通輸送手段とすることで知られた人々だった。おそらくウスリー川とアムール川の合流地点より下流で，ゴリン川が合流する地点あたりまでの地域を指していたと考えられる。

15）牡丹江中流にあった当時の清の松花江，ウスリー川，アムール川流域に対する支配拠点があった町。コリハが活躍した当時は寧古塔将軍が駐留したが，将軍衙門は 1676 年に吉林に移り，その後は 1 地方拠点となっていた。

16）奉天とも呼ばれる。現在の瀋陽市にあたる。太宗時代までは清の宮廷があり，1644 年に清が中国本土に進出してからは盛京将軍が駐留して東北支配の最大拠点となっていた。太宗時代までの宮殿は「瀋陽故宮博物館」として保存されている。

17）7 つのハラから構成されていた地方の人々。おそらくウスリー川からアムール川にかけて居住していたと考えられている。松浦によれば『清実録』（世宗憲皇帝実録）以外の資料では「八姓」とされている。その内訳は，ウルグンケレ Urgungkere，ナムドゥル Namdulu，グファティン Gufatin，キヤカラ Kiyakara，ホルフォコル Horfokol，ムリヤリヤン Muliyaliyan，シヌルフ Sinulhū，ビラ Bira の各ハラだった（松浦 2006: 321, 323）。

18）雍正 9 年の七姓あるいは八姓での調査は『清実録』（世宗憲皇帝実録）にも見える（清実録（世宗実録 2）1985: 458）。『依蘭縣志』では「雍正九年，特旨派招撫霍爾佛闊八姓人丁帰旗當差着有勤勞，奉旨賞穿黄馬褂留京充一等侍衛」（雍正 9 年，特別の命令によって霍爾佛闊（ホルフォコル）らがいる八姓地方の人々の招撫のために派遣され，彼らの八旗への編入に功績があった。それが賞されて，黄色の馬掛が許され，北京にとどまって，一等侍衛に充てられた）（依蘭縣志 1921（1974）: 148）とある。

19）確かに三姓駐防の正紅旗世管佐領に托精阿という人物はいた。ただし，『吉林通志』65 巻の「職官志」三姓佐領の一覧表では，1769 年（乾隆 34 年）に父親の穆克徳恩保の後を継いで佐領となり（「穆克徳恩保子，任一牛彔世管」），1793 年（乾隆 58 年）には，息子の額勒錦に佐領の職を継がせている（吉林通志 1900（1986）: 1035–1036）。間宮林蔵がデレンを訪れた 1809 年（嘉慶 14 年，文化 6 年）にはすでに托精阿は正式には佐領の職を退いていて，しかもかなりの高齢になっている（佐領就任から 40 年もたっている）はずなのだが，三姓副都統衙門は引退した元佐領を，アムール川下流域と樺太の毛皮貢納民たちのところへ派遣したのだろうか。

20）例えば，乾隆 56 年（1791 年）11 月 5 日付けの檔案に次のような一節がある。geiker hala. sira gašan tofohon boo, šahūn ulgiyan aniyai tofohon seke be sijigiyan eture tulhina benjihe. sira gašan juwan ninggun boo, šahūn ulgiyan aniyai juwan ninggun seke be gašan da lioge, sijigiyan eture kila benjihe.（三姓檔案 70 巻 1791: 421–422）これを訳すと，「ゲイケル・ハラ。シラ村，15 戸，辛亥の年に 15 枚のクロテンの毛皮を穿袍人のトゥルヒナが送ってきた。シラ村，16 戸，辛亥の年に 16 枚のクロテンの毛皮を村長のリオゲと穿袍人のキラが送ってきた」となる。なお，穿袍人 sijigiyan eture とは，緞子織りの朝衣（緞袍）を着用する権利を有する人で，毛皮貢納民の間では氏族長 hala i da，村長 gašan da に次ぐ 3 番目の地位にある人を指す。彼らは氏族長や村長の子弟であることが多いため，子弟 deote juse と呼ばれることもある。

21）ハラ外婚を原則とするナーナイの婚姻制度を考えると，ゲイケル・ハラ所属の女性が多すぎ，それ以外の女性が少なすぎる。他のハラ出身でゲイケル・ハラの男性に嫁いできた女性が，調査時に夫の姓で答えた可能性もある。

22）ただし，ロシアの場合にはロシア人をはじめとするヨーロッパ系民族の文化についても，民族学博物館の文化展示では歴史性を捨象している。例えばサンクトペテルブルクのロシア民族学博物館にはロシア，ベラルーシ，ウクライナといったスラブ系諸民族の展示が比較的大きなスペースをとって展開されているが，そこにも歴史性はあまり見られない。すなわち，各民族の文化の中核的あるいは本質的な部分を表現するのが民族文化展示であり，それは時代の制約を超越しているとされる。多くの場合実際に展示されるのは 19 世紀から 20 世紀初頭ぐらいの時代に製作あるいは使用された資料だが，その時代の時代性は表には出さない。それらには産業革命の影響を受けていないものが多く，そのような資料の中に各民族の文化の中核部分あるいは本質を見いだそうとするわけである。

23）それには研究者が自分の研究に基づき選び出す場合と，展示される民族の要望に基づいて

選び出す場合とがあり，近年では両者の協力によって選び出すのが主流となりつつある。後者は D. F. キャメロン Duncan F. Cameron が 1970 年代に提唱し始めた「フォーラムとしての博物館」（Cameron 1972）という概念を呼び覚まして民族学博物館の展示理念とする動きの一環で，欧米，日本などでしばしば試みられる手法である。ただし，日本の国立民族学博物館の事例でもそうだが，多くの場合，フォーラムとしての博物館の展示を行おうとすると，展示される側は文化の中核部分と同時に，彼らの現実の状況もできるだけ表現しようとする。したがって，もはや文化の中核部分を展示する民族学博物館も，展示資料の時代性を無視して展示を制作することはできない。

24）　正確には都指揮使司。かつて元が東征元帥府をおいた場所に明が設置した役所，永寧寺と呼ばれる仏教寺院も建立された。現在のハバロフスク地方ニコラエフスク地区ティール村の近郊にある。

25）　先住民族の社会や文化を原始，未開と規定し，それ故に貧しいと決めつけて，その生活改善のために，保護政策と同化政策（近代社会，近代文化への同化を目指す）を推し進めるという政策は，日本も北海道，樺太，千島のアイヌ，そして樺太のウイルタとニヴフに対して行った。テッサ・モーリス鈴木は，そのような政策が，日本とロシア（旧ソ連を含む）で，政治体制が全く異なるにもかかわらず，共通していたということを指摘している（モーリス＝鈴木 2000: 141–144, 152–156）。それに際して国が進めた植民・開発政策や先住民に対する同化政策，強制移住政策などが，彼らを生活基盤としていた資源（狩猟漁撈採集のための資源）から疎外したことは事実で，社会崩壊，貧困化，固有文化喪失をもたらした。さらにそれと同時に，国ぐるみで喧伝された社会，文化の未開性，後進性ゆえの貧困という言説とそれらが引き起こした差別と偏見も，そのような事態に拍車をかけていたといえるだろう。関連して，佐々木（2013）も参照。

26）　日本とロシアの間の研究協力は，アイヌ文化研究と樺太史研究において始まっており，一定の成果を上げている。例えばロシアの博物館（ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館とロシア民族学博物館）が所蔵するアイヌ関係資料の悉皆調査が 1990 年代から 2000 年代にかけて実施され，その成果は報告書と特別展の形で公開された（SPb- アイヌプロジェクト調査団編 1998; 荻原他編 2007; アイヌ文化振興・研究推進機構編 2013）。また，サハリン州郷土博物館（かつての樺太庁博物館の建物と資料を継承した博物館）では 21 世紀に入って日本領時代の展示を制作した。

27）　ロシア正教徒の中で 17 世紀にモスクワ総主教ニコンが提唱した典礼改革に反対して，それまでの慣習，儀礼等を維持しようとした人々。ヨーロッパロシアで迫害されることが多く，シベリアから極東地域に移住して信仰を守ろうとした。多くの宗派に分かれるが，シベリア・極東への移住者の中には外部との接触を断って閉鎖的な社会を形成するものも多かった。坂本・伊賀上（2007）などを参照。

文　　献

アイヌ文化振興・研究推進機構編

2013　『ロシアが見たアイヌ文化：ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより』（展示図録）札幌：アイヌ文化振興・研究推進機構

赤松智城・泉　靖一

1938　「赫哲族踏査報告」『民族学研究』4(3): 384–405。

安俊

1986　『赫哲语簡志』（中国少数民族语言简志丛书）北京：民族出版社。

Березницкий, С. В. и др.

2003　*История и культура нанайцев : историко-этнографические очерки.* Санкт-Петербург: Наука.

Cameron, Duncan F.

1972　The Museum: a Temple or the Forum. *Cahiers d'histoire mondiale* (Journal of world history) 14(1): 189–202.

Clifford, James and George E. Marcus (eds.)

1986　*Writing culture: the poetics and politics of ethnography*. Berkeley: University of California Press.

黑龙江省编辑组，《中国少数民族社会历史调查资料丛刊》修订编辑委员会編
2009 『赫哲族社会历史调查』北京：民族出版社。
《赫哲族简史》编写组
1984 『赫哲族简史』哈尔滨：黑龙江人民出版社。
黄任运
2006 『赫哲绝唱 : 中国伊玛堪』哈尔滨：黑龙江人民出版社。
黄泽・刘金明編
2004 『赫哲族：黑龙江同江市街津口乡调查』昆明：云南大学出版社。
細谷良夫
1999 「第二章 清 2 中国支配の成立」松丸道雄・池田温・斯波義信・神田信夫・濱下武志編『世界歴史大系　中国史 4──明～清』pp. 319–334, 東京：山川出版社。
洞　富雄
1974 『北方領土の歴史と将来』東京：新樹社。
風間伸次郎
1996 「ヘジェン語の系統的位置について」『言語研究』109: 117–138。
1997 「ツングース語の方位名称について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』6: 113–124。
Lattimore, O.
1933 The Gold tribe “Fishskin Tatars” of the Lower Sungari. *Memoirs of American Anthropological Association* 40: 1–70.
Laufer, B.
1902 *The decorative art of the Amur tribes*. Memoirs of the American Museum of Natural History v.7. New York: Knickerbocker Press.
Левин, М. Г. и А. П. Потапов
1954 *Народы Сибири*. Москва и Ленинград: Издательство Академии Наук.
凌純聲
1934 『松花江下游的赫哲族』南京：国立中央研究院歴史語言研究所。
刘敏
2007 『赫哲族历史文化研究』哈尔滨：黑龙江人民出版社。
Лопатинъ, И. А.
1922 *Гольды Амурскіе, Уссурійскіе и Сунгарійскіе: Опытъ этнографическаго изслѣдованія*. Владивостокъ: Владивостокское отдѣдение приамурскаго отдѣла русскаго географическаго общества.
松浦　茂
2006 『清朝のアムール政策と少数民族』京都：京都大学出版会。
間宮林蔵（口述）・村上禎助（筆記）
1810（1988）「東韃地方紀行」洞富雄・谷澤尚一編注『東韃地方紀行他』東京：平凡社。
孟慧英
1998 『薩滿英雄之歌──伊瑪堪研究』北京 : 社会科学文献出版社。
宮本馨太郎
1958 「オロッコ・ギリヤークの衣食住」『民族学研究』22(1-2): 5–14。
モーリス＝鈴木　テッサ，大川正彦訳
2000 『辺境から眺める──アイヌが経験する近代』東京：みすず書房。
荻原眞子・V. V. ゴルヴァチョーヴァ・古原敏弘編
2007 『ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』東京：草風館。
岡　正雄・馬場　修
1938 「北千島占守島及び樺太多来加地方に於る考古学的調査予報」『民族学研究』4(3): 117–180。
Оненко, С. Н.
1980 *Нанай-лоча хэсэнкуни (нанайско-русский словарь)*. Москва: Издательство «Русский язык».
太田好信
2001 『民族誌的近代への介入──文化を語る権利は誰にあるのか』京都：人文書院。

Патканов, С.
1906 *Опытъ географіи и статистики тунгусскихъ племенъ Сибири на основаніи данныхъ переписи населенія 1897 г. и другихъ источниковъ*, часть II, прочие тунгусские племена, (Записки императорскаго русскаго географическаго общества по отделенію этнографіи, томъ XXXI, часть II), Санктъ Петербургъ: Императорское русское географическое общество.
1912 *Статистические данные, показывающие племенной составъ населенія Сибири, языкъ и роды инородцевъ (на основании данныхъ специальной разработки материала переписи 1897 г.)* том III. Иркутская губ., Забайкальская, Амурская, Якутская и Приморская обл. и о. Сахалинъ. (Записки императорскаго русскаго географическаго общества по отделенію статистики том III, вып. 3), Санктъ Петербургъ: Императорское русское географическое общество.
阪本秀昭・伊賀上菜穂
2007 『旧「満州」ロシア人村の人々──ロマノフカ村の古儀式派教徒』東京：東洋書店。
佐々木史郎
1990a「アムール川下流域諸民族の社会・文化における清朝支配の影響について」『国立民族学博物館研究報告』14(3): 671–771。
1990b「レニングラードの人類学民族学博物館所蔵の満州文書」畑中幸子・原山煌編『東北アジアの歴史と社会』pp. 195–216，名古屋：名古屋大学出版会。
1991 「アムール川下流域住民の民族構成の研究に関する覚書」『民博通信』51: 36–56。
1994 「松花江におけるエスニックな出会い──フルハ部ゲイケル・ハラの軌跡」黒田悦子編『エスニックな出会い』pp. 263–288，東京：朝日新聞社。
1996 『北方から来た交易民──絹と毛皮とサンタン人』東京：日本放送出版協会。
1998 「18，19 世紀におけるアムール川下流域住民の交易活動」『国立民族学博物館研究報告』22(4): 683–763。
2001 「近現代のアムール川下流域と樺太における民族分類の変遷」『国立民族学博物館研究報告』26(1): 1–78。
2008 「松浦茂著『清朝のアムール政策と少数民族』（東洋史研究叢刊之六十九）」『史學雑誌』117(3): 105–114。
2010 「サンタン交易の経済学」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』pp. 515–536，札幌：北海道大学出版会。
2011 「ヘジェ・フィヤカ・エゾ──中国と日本の北方民族に対する認識とエスニシティの形成」佐々木史郎・加藤雄三編『東アジアの民族的世界──近代以前における多文化的状況と相互認識』pp. 178–211，東京：有志舎。
2013 「一九世紀の国境策定と先住民──アムール，樺太，千島における日ロ中のせめぎあいの中で」『東アジア近代史研究』16: 23–44。
Сасаки, Сиро
2008 Межэтнические браки коренных народов Нижнего Амура и Сахалина. *Россия и АТР* 2008 № 2 (60): 64–74. Владивосток: Институт истории археологии и этнографии народов Дальнего Востока ДВО РАН.
SPb- アイヌプロジェクト調査団編
1998 『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』東京：草風館。
Сем, Ю. А.
1973 *Нанайцы: материальная культура, вторая половина XIX - середина XX в.: этнографические очерки*. Владивосток: Академия наук СССР. Дальневосточный научный центр.
Шимкевичъ, П. П.
1896 *Матеріалы для изученія шаманства у гольдовъ*. Хаваровскъ: Типографія канцеляріи приамурскаго генераль-губернатора.
Шренкъ, Л. И.
1883 *Объ инородцахъ амурскаго края*. том 1, Санктъ Петербургъ: Императорская академія наукъ.
1899 *Объ инородцахъ амурскаго края*. том 2, Санктъ Петербургъ: Императорская академія наукъ.

1903 *Объ инородцахъ амурскаго края*. том 3, Санктъ Петербургъ: Императорская академія наукъ.
Штернберг, Л. Я.
1933 (1991) *Гиляки, орочи, гольды, негидальцы, айны: статьи и материалы*. Под редакцией и с предисловием Я. П. Алькор (Кошкина). Хабаровск : Дальгиз (Tokyo: Nauka Reprint, 1991).
Смоляк, А. В.
1975 *Этнические процессы народов Нижнего Амура и Сахалина*. Москва: Издательство «Наука».
杉島敬志
1995 「人類学におけるリアリズムの終焉」合田　濤・大塚和夫編『民族誌の現在──近代・開発・他者』pp. 195–212，東京：弘文堂。
鳥居龍蔵
1924 『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』東京：岡書院。
1936 『考古学上より見たる遼之文化図譜　四冊』東京：東方文化学院東京研究所。
1937 『遼の文化を探る』東京：章華社。
1947 「奴児干都司考」『燕京学報』33: 7–76。
Tikhvinsky, S. L. (ed.)
1985 *Chapters from the History of Russo-Chinese Relation 17th–19th centuries*. Moscow: Progress Publication.
楊賓
1985 「柳邊紀畧」『影印遼海叢書』一 pp. 235–272，瀋陽：遼瀋書社（1985 年影印遼海叢書所収）。
曹廷杰
1885（1985）「西伯利東偏紀要」『影印遼海叢書』四 pp. 2269–2292，瀋陽：遼瀋書社（1985 年影印遼海叢書所収）。

史料

ДАИ том3
1848 *Дополненія къ актамъ историческимъ, собраннымъ и изданнымъ археографическою коммиссиею*, том 3. Санктъ Петербургъ: Русская археографическая коммиссія.
皇清職貢圖
1761（1991）『皇清職貢圖』傅恒編，瀋陽：遼瀋書社（1991 年影印）。
吉林通志
1891（1986）『吉林通志』長順等（修），李桂林等（纂）李澍田等（点校），吉林：吉林文史出版社（1930 年重修，1986 年長白叢書所収）。
満文老檔 IV（太宗 1）
1959 『満文老檔』IV 太宗 1，満文老檔研究会（訳註），東京：東洋文庫。
清代中俄關系檔案資料選編
1981 『清代中俄關系檔案資料選編』中国第一歴史檔案館編，北京：中華書局。
清実録（太宗実録）
1985 『清実録』二（太宗文皇帝実録），北京：中華書局（1985 年影印）。
清実録（世祖実録）
1985 『清実録』三（世祖章皇帝実録），北京：中華書局（1985 年影印）。
清実録（聖祖実録 3）
1985 『清実録』六（聖祖仁皇帝実録 3），北京：中華書局（1985 年影印）。
清実録（世宗実録 2）
1985 『清実録』八（世宗憲皇帝実録 2），北京：中華書局（1985 年影印）。
三姓档案
1791 『三姓档案』70 巻（乾隆 56 年），沈阳：辽宁省档案馆。
三姓副都统衙门满文档案译编
1984 『三姓副都统衙门满文档案译编』辽宁省档案馆・辽宁省社会科学院历史研究所・沈阳

故宫博物馆（译编），沈阳：辽沈书社。
東京大学史料編纂所編
1922（1972）『大日本古文書　幕末外国関係文書之十五』東京：東京大学出版会（初版は1922年，東京帝國大學文學部史料編纂掛編）。
依蘭縣志
1921（1974）『合江省依蘭縣志』（中國方志叢書東北地方第35號）楊歩犀（纂修），台北：成文出版社（1974年影印）。